
転生…いや…いいんだけどさ

Rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生…いや…いいんだけどさ

【Nコード】

N5708R

【作者名】

Rei

【あらすじ】

最強チートを手に入れた主人公は、『ただの平和な世界』へと降り立つ。悔いのないように、親を、友を幸せにするために立ち上がる。前世では、悔いがあったから

プロローグ

転生――

二次小説などで扱われるもので、神様等がでてきて、『殺してしま
ったから転生しろ』という言葉から始まるもの
物語の出発地点

――いいんですけど、まあ、うん――目の前にこの状況がなければ。
土下座、自称…神さま

……とりあえず色々まとめて見るか。

俺の名前は神楽一樹、今年高校二年となる少年と青年の境にいる男。
好きな教科は数学、歴史、物理、英語
嫌いな教科は特にナシ

先生の評価は器用貧乏、理系にも文系にも、コレッ！という感じの
モノがないことで、進路に困り果てているただの高校生だった。

別に幼馴染なんていないし、ブラコンの妹なんてさっぱりだし、頭
が秀でているわけでもないし、帰国子女でも、いきなり妖精っぽい
ものが現れて魔法の世界へいたり、変身ッ！といったらお茶の間
の戦士になるわけでもない、人生に何の目標もなく、ただ親がどこ
からかもってきたパンフレットをみて高校を決めたただの高校生。

――まあ、『だった』が最後につきますが……

前を歩く小さな親子をボォッと見ながら、懐かしさを感じつつ、登
校中だったある日、一台の大型自動車が突っ込んでくるのをみまし
た。そしてそこには、横断歩道を手を上げて渡る親子が。

――そこからながあったのか、足が思わず動き出し、親子を突き

飛ばし。
そして

「……死んだのか、オレは」

呆然としながらボソリといえば、その言葉が耳に入ったのだろう、自身を伸ばしと読んだ男は悲しそうな顔をした。そして小さく、短く「はい」と返答される。

「……」

むなしさがこみ上げてくる。――親子との仲はお世辞にもいいとはいえないだろう。それでも親の『努力』というものをカラッポにあげて

「友達にも会えないのか」

友人関係は広くないけど、その代わりにあいつらとは大きな大きな絆があったと思う。

馬鹿なことをした、それで起こられたこともあった。

「――なんて、オレは親不孝モノの友不孝モノなんだ。」

肩を組み合って、笑いあった。

走馬灯が今更のように駆け巡る。

涙がツウツと流れ出す。

泣き喚きはしない、それで何になるのかなんてわかりきっている。死んだものは死んだのだ、そこがどうなるわけではない。泣き喚きたい、叫びたい、神様を殴り続けたいでも、どうにもならないのはどうにもならない

「なあ、神さま、オレはこれからどうなるんだ？」

「――転生を。」

「輪廻転生ってやつか。」

親にあえなくなった、友にあえなくなった、心が何か空虚なものに感じられたけれど、オレはそれを聞いて笑った。

――二次小説みたいな展開じゃねえか、ありえねえ、なにこのテンプレ、パネエwww
なんて思わなきゃ、あふれ出す涙が止まらないだろうから。

「じゃ、オレはマジチートになればいいのか？」

「――ご希望とあらば。」

「ハハッ、ハハハハ……ハハ。ううつ、うえっえぐっうわああああああああっ！」

耐え切れなかったらしい、涙が押し流され泣き叫び始める。

なんだよ、なんだよこれ。ハハハ、チートになればいいってか？それじゃ何も変わらないんだよ。

異世界でがんばって、なんになるってんだよ。

みんな通り過ぎちまったんだよ、オレの前を通り過ぎて、オレはそれに笑って手を振ることさえ許されない。

「いい、よ。もう、いい。天才にしてくれ。何もかもに最上級の才能をくれ、もういいんだ、楽しむよ、いくらでも楽しんでやる。」

「はい。」

「あと——それです。オレが異世界で前を向いて歩いている限り、親と友達が幸せである力をくれよ。」

「……はい」

そういつてオレは、笑って世界から消えた。

第一話

生まれ出る。

思い出したのか、それとも意識がちゃんとできあがったのか、1歳3ヶ月目にして、『オレ』という存在が現れた。『有羅場^{あらば}樹^{いづき}』ゆっくりと立ち上がり、外をみる。

——そこにあった景色は、ちよつと感動した。
どんなにあがいても、庭にある柵よりも高い位置から見ることで
きない。

転生というものを、そんなことから実感した。

「……」

1歳3ヶ月、ある程度のことはできるようになり、親に迷惑はかけるだろうが、生まれでた時よりは少ないだろう。

夜泣きに排泄物の処理、食事の世話——迷惑をかけたんだろうな。
それでもやってくれたってことは、愛してもらえているということだ。

——前世で理解しなかった愛情を今理解したとは

前世のことを思い出すと、心がキュツと締め付けられる。

——がんばろう

思い出して、むなしくなって、それでよりいっそう、そう思った。

二次創作というものがある、漫画の『平行世界』というものを題材にして描かれる物語というものだ。

それは戦略的に描かれるかもしれない、もしくは最強主人公として描かれるかもしれない、ほのぼのとして描かれるかもしれない。

転生といったからには、何かしら死亡フラグあふれるかと思えば、別にそんなことはないらしい。

前世となにも変わらない日常というものがあつた。

「がんばる」

喋りにくい口だけれども、その言葉はハッキリと出ていた。

勉強も、武術もがんばる。

——親の幸せなんてわからない。

でもがんばって生きることが親孝行なのかもしれない。

「がんばるっ！」

幼稚園へと入っていった。

年少組というやつだろう。

『ひまわり組』という札がかけられた教室をみる。

小さな子供たちがいっぱいいる。

これがオレの入る教室だ、これまでに親の目を盗んで本を読み続け、色々なことを知った。

『才能』この存在を願ったが、これを願ってよかったと思う

アニメの能力とか言っても無意味だった。うん、まあ国民的猫型ロボットのポケットは欲しい気がしたけれど。

その教室に入ると、騒がしい。

まあ小さな子供がいるんだし、仕方ないのだろう、走り回ったり、遊びまわったり。

そんなヤツらをみながら、オレはいすへと腰掛けた。

——どうしよう、ついていけん

この年のノリにまったくついていけなかった。

高校生というものは、年齢的に大人と子供の間だ、だが求められるのは『大人』というものだ。

自分で考えて行動しなければダメ。

だがこの年の少年少女となると、『考える』というものがない。

好奇心をもってみんな動いている。

『○○をこうやったらどうなる？』というものを、危険とかそんなものは考えずにやる。

そんな年齢だ。

『○○をこうやったらどうなる？』を高校生にやらせるとしよう。

やるのはたぶん教室だ、教科書や先生に聞いてきて、『安全』というものちゃんと理解した上でやるだろう。

未知のものへの心構えというものがあるのだ。

だがこの3歳という年齢はそんなことはなく、ワーワーキヤーキヤ——と叫んで、遊びまわる。

——絶対に保育園の先生にはならない

そんなことを考えた。

——今日も今日とて、仕方なしに周りの幼き少年少女達ををたしなめ続ける。

危険がある行動があれば、必死になって守り続け、保育の先生の負担を少なくする。

保育園の先生、保母というものだろう『みゆき先生』という人だ。若く、新任なのだろう、最初に来たときは辛そうにしていたのをみて、オレは仕方なしに手伝うことにした。といっても気を遣わせることのない暗闇からの手のように、誰かがわからない程度にやることにするけど。

ある日、近くの自然公園へと散歩に出かけた。

みんなニコニコとキャイキャイと騒がしく歩き始める。それを後ろから見ながら安全を確認する。

前世のニュースで、飲酒運転により児童が死んだなどというニュースがあった、それを抑えるためだ。

無事についたときには、本当に安堵の息を吐いた。

自然公園では、各々の児童たちが遊びまわっている。

範囲は決められて、それに従いながら遊びまわる。

俺は危険な鬼ごっこの中に入り、走り回る。

——スペックについてはこう考えるといい

中国の漢の時代の末期に生まれ出たなら有名な武将になれたこと間違いないだと。

弾丸のように走り出せば、この年齢で50メートル8.9秒、自分

で計測したのだがありえない数字だ。

だからこそ、それを抑えて走る。

そのとき視線を感じ、そちらのほうをみると、みゆき先生がいた。じつとコチラを見つめる先生をみて、冷や汗を流しながら手を振ってみる。

ぎこちないながらも手を振り替えてくれた。

――変に思われでもしたのだろうか

――sideみゆき先生

子供が好きなわけではない。

――でも笑顔をみるのがすき。

そんな理由で私は保母となる。試験を受けたりして、やっと保母になれたと思えば、現場の辛さに根を上げそうに成っていた頃だった。泣きそうになっていると、ひとりの少年、『樹』君がこちらをみているのに気づき、思わず視線を向けたことがあった。

―そのときには樹君がいなかった、『気のせいだろう』と、ちよつと心配そうにみていたことを思い出す。その時のことが勘違いではないと知ったのはそう遅くない時期だった。

仕事が楽になった。

慣れてきたというものもあるのだが、そこには一人の児童、そう樹君の影があった。

子供が無茶をして泣き始めると、彼がたしなめて泣き止ませ、怪我

をすればおんぶをして保健室へと駆け込んでくる。
隠れて助けているつもりなのだろうか、私が来る前に解決して颯爽
といなくなる樹君をみて大人びたところのなかの幼さにクスリと笑
った。

自然公園への道のりで、安全を確認している少年をみて、背中を預
けられるのが子供だということが少しおかしくて笑った。

l s i d e E N D

鬼ごっこといっても、自然公園だ、人工の山の自然の中で隠れなが
ら走り回る。

—もうコレって隠れ鬼ってやつじゃないかな？なんて思いながら、
裏をかいて道路と自然の境である林に身を潜める。

その時だった。

ポンポンツという音が聞こえて、そちらをみると、ピンク色のボー
ルが道路へと出て行った。

ビニール製でピンク色の反射が大きい眩しいボールだ。

そこにきたのは車、一台の乗用車。

—おいおい、それを追っかけて飛び出してくるやつなんていないよ
な？

なんて思っていれば、そうだった。幼女——響きは悪いが、飛び出
してきたのだ。

その光景に驚きながら全力で走り出す。

——なんてこったい

間に合わなければどうしたらいい、いっしょに死ぬか？

叫ぶ、叫びながら足に力を入れて、飛ぶ。

キキキイイツという車のブレーキ音が響き渡る、だが間に合わない。

「うおおおおおおおおお！」

叫びながら飛んで――ギリギリセーフくらいだ。空中で少女の体を引つつかんで空中で無理やり体制を入れ替え、自身を下へと置く。レンガ造りの歩道にぶつかり少々痛かったが、無事だった。

「うおおおおおおおおお！」

心臓がドキドキしすぎて、へんな声をだしながら息を整える。頭は熱く心も熱い。

抱いている少女をみれば、――泣き出した。

「ふえええん」

「えっちょ！？泣かないでくれ！」

泣き出したのをみてパニックになりながら抑えようとする。どうすればいい？

男なら『漢』^{おてい}ってヤツを語りまくっていれば何故か泣き止んだ。だけど女ならどうしていいかわからない。

「（どうすればいい！どうすればいい！）」

「ふえええん、えぐっえぐっ」

DOすんのよ! ああもういい、先生に任せよう!

「ほれ」

「ふえ？」

手を差し出すと、泣きながら手をみる。――どうすればいいかわからないのか?

「握れよ。一緒に帰るぞ」

「ぐすつ、うん……」

そういえば、握り返してくる。なんかほえましい

「なあ、お前の名前ってなんだ？」

「ゆき……かざみ、ゆき」

「そうか、ユキか、いい名前だな、俺は有羅場あらば 樹いつきだ。」

「いつきくん？」

「おうっいつちゃんでもいいぞ!」

「いつちゃん……うんっいつちゃん!」

何故かわからないが、笑ってくれたのをみて笑い返す、ほっとしながら俺は駆け寄ってくる先生のところへと走り出し――

そして預けた瞬間に鬼となったのは仕方がないことだろう。

空気読めよオ！ほのぼのとしていた空気だろオーがッ！

「待てエエエ！男の風上に置けんヤツがアア！」

「うわアアッ、樹こゝろが怒ったッ」

第二話（前書き）

母親マジチート

第二話

『風見雪』
かざみゆき

俺が助けた幼女の名前だ。

その後何故か懐いてくれて、共に遊ぶことがよくある。

「じゃーねー！ いっちゃーん！」

「ああ、じゃあな。」

今日も今日とて雪と遊び、元氣良く笑う名前のおり、雪のような輝く笑顔を見ながら、俺は微笑しながら手を振り替えた。

この頃の女の子といえはお人形遊び、というあまり女性経験のない自身が勝手に思ってたのだが、男の子のような遊びもしていたことがわかった。

――区別するだけ無駄か
ゆき
なんて思いながら俺は雪と遊ぶ日々を送り、いつも通りに帰る。

「ふうっ」

走り回って疲れた汗を拭いながら、自分の家へと足を向ける。――
足が重い。

「がんばれ俺っ、幸せにするって決めただろっ」

自分自身にがんばれといって、足をパンツと叩く。
そして顔を前に向ける。

こんなことをやっているが、俺は虐待などを受けたことはない。
飯をだされないことなんてない、家族と不仲なわけではない。

——むしろ逆

そう、仲が良すぎるのだ、一方通行だけど

「た、ただいまー」

なるべく小さな声で、ただいま、という。

こんなことで防げるわけではないことはわかっているのだが——

ドタドタドタッ！！

「（ああ、きたか……）」

そう思いながら目を瞑る。

いつものことだ、だからもう逃避している。The 現実逃避

「はあーいっ！い・つ・き・ちゃんっ☆」

でてきた小学生みたいな体格をした女性——これが俺の母親だ。

『有羅場春子』あらば はるこ身長は121cm、いつになったら伸び盛りなの？
なんて聞きたくなるような身長をひっさげて、彼女は俺に抱きついてきた。

「か、母さん……」

「おかえりなさい、樹（き）、ご飯にする？それともお風呂？もしかして、あ・た・し？キャハーン☆」

「落ち着いて母さん。」

「でもお樹（き）ちゃんならあ、いいかもっ？えへへっ将来有望だもんねっ、だって水樹（みずき）さんとの子供だもんっ」

「ねえ母さん？」

「水樹（みずき）さんは死んじやったけど、私が大きく育てなきゃ……おいしそうに。」

「……よし、今は聞かなかったことにする。
——とりあえず、今ので気づいた方もいるだろうが、俺には父親がいない。

幸せにする、と決めたわけだが、その後飛行機事故で、単身赴任から帰宅するときに死んでしまった。
それでも、母さんが幸せになれば幸せになってくれると信じているからこそ、俺は今母さんを幸せにしようと思っている。

「母さん、聞いてよっ」

「ん、なあに？樹（き）ちゃん。」

「——ああ、やっと聞いてくれた。」

「……話の流れというか、なにも聞かないでおかしくなっている母を止めるために呼び止めたのだが、何を言いたいのか決めていなかった

た。

どうしよう？ええと、適当なことを聞こうか。

「き、今日の晩御飯は何？」

「んー？いっちゃんの好きなハンバーグ。」

「うん、ありがとー！」

「ああもうかわいい食べちゃいたい。」

「わーい、うれしいな、うれしいーなっ！」

はしやぎながら、瞬間的に力をいれ、一気に走り出す。

ダッシュだ、この空気から逃げ出して自分の部屋に引きこもりたい気分だ。というか面倒。

「えへへへ、鬼ごっこ？鬼ごっこ？」

「いや違います！」

母さんは勘違いでもしているのか、笑いながら追いかけてくる。

——まさに鬼にみえるのは俺だけだろうか、人間を食べようとしている鬼に

「うふふふ、お母さん嬉しいな、いっちゃんとっても強く育って。とっても足が速いのね。」

「ありがとう！おかあさあああああん！」

春子——俺の母親は、はっきり言うところありえないほどの高スペックを誇る。

俺の身体能力や学習能力というものが、どんなに知られようが不気味に思われないのがこの母親の所為だ。

『50m走5・3秒』

『握力98・6?』

『習得言語18ヶ国』

『全武術全国制覇』

武勇伝は色々ある。

マフィアの本拠地へいつて潰してケロッとして帰ってきたとか
首相を暗殺から護ったとか

戦争を一人でとめたとか

——そんな彼女を愛したのはまったく普通の男性だったけど

その小学生な体にどこに力があるんだと叫びたくなるような体。

——まあつまり、この俺の体でも勝てないわけで。

「つーかまあええっ☆」

「ぐああっ!?!」

「うふふ、いっちゃんの愛を感じるわぁ、だからいっちゃんもお

母さんの愛を受け止めてね！」

「きよ、拒否します。」

「恥ずかしがらナイ☆」

「うわっひきっ引きずらないでっ、ヤメテー！」

「さーてお母さんの部屋へいこーっ！」

ぱたんっ

……母親の部屋から樹いつきの悲鳴が聞こえた。

【有羅場春子あらば はるこ】

身長…121cm

性別…女性

性格…天真爛漫

職業…翻訳家

能力…規格外

それを愛した男性

【有羅場水樹あらば みずき】

身長…172cm

性別..男性

性格..平和主義

職業..大学助教授

能力..ちよつとした靈感くらい

「——靈感があるだけでおかしいけど、母親がこんなだから普通に見える…」

服を直しながら、疲れた溜息を吐いて、俺は溜息を吐いた。

第三話

「ねえねえいっちゃんいっちゃん！」

雪^{ゆき}が笑いながら駆け寄ってくる。それをみてそちらの方向を見ている。

「なんだ？雪^{ゆき}」

「えへへー、いいこと教えてあげるっ」

その笑顔は誇らしげで、笑いながら胸をはって、雪^{ゆき}はいった。

「ラーメンやさんのラーメンにはいつているメンマっていう、ちゃい로운やわらかいものって、わりばしをにればできるんだよっ！」

「（騙されとるッ!?!）」

啞然としたが、すぐに顔を戻す、ポーカーフェイスというやつだ。
決して笑ってなんかいない笑ってなんかいないぞ

ーがんばれ俺、プルプル震えるな俺。

「だ、誰からブツ：誰からき、きききいたんだい？ブフォッ」

「どういたのいっちゃん？」

「い、いいい、いいからグググ：」

「へんないっちゃん。しんせきのおにーさんからだよっものしりな
んだっ、きくらげはこーもりさんのはねなんだって！」

「（くらげはどこにいったんだよ！）へへへへえ：そうなんだブツ
：ククキクゲゲゲ」

「だいじょーぶ？」

「うん、大丈夫ッ！（逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ）」

心の中で必死になって耐え続けながら、聞こえない程度に息を吸っ
て吐いてを繰り返す。

不思議そうに雪はみているけれど、いつかきつと騙されたとわかる
日がくるだろう。

「でねっいっちゃん、きょうね、おにーさんとゆりちゃんがくるん
だって！」

「ゆりちゃん？」

「えっと、おにーさんのいもうとだったかな？」

「そうか、それは楽しみだな。」

「うんっ！でねっ！っちゃんもこない？」

「え？」

「いっちゃんもしょうかいしたいの！」

「…迷惑じゃなければ、だけどね。お母さんとお父さんに聞いてみなよ。大丈夫だったら行くからさ。」

「うんっあとでおでんわするね！」

「ああ、待ってるぞ。」

そんな会話をした土曜日の午前中、元気が良い雪ゆきを笑顔で家の近くまで届けて、俺は家へと戻る。

戻ってきた瞬間に電話で「だいじょうぶだったよ！」という雪ゆきの声を聞いて、とりあえず昼飯をくってから行くと声をかけて電話をきった。

「母さん、ご飯ある？」

「いっちゃん、私のほかに女ができたのね!？」

「いや、なにその昼ドラみたいなの。」

「悔しいっ、自殺してやるっ!」

「いや、もういいから。」

「でもその前に死ぬほどいっちゃんを味わってやるッ!」

ダッ（全力疾走を始めた俺の走る音）

ガシッ（掴まれる音）ドゴォンッ！（落ちる音）

「うおおおおお!？」

「いっちゃん、うへへへ」

「お助けエエー!」

結局、雪^{ゆき}の家にいけたのは三時間後だった。
飯は一時間ぐらいで食べ終えたのだが――

「おそかったね!」

「色々あつてね…」

ものすごいげっそりしながら雪の家へと到着する。雪が時節「だいじょうぶ？」と聞いてくるが、それに笑顔で返しながら俺は雪の家を歩き続けた。

「あら、樹くん、いらっしやい。」

そうやって笑って出迎えてきたのは雪の母親、吹雪さんだ。温和な人で、綺麗な人だ。

「やあ樹くん、娘はやらんぞ？」

そしてもう一人が雪の父親、三月さんだ。ご覧の通りの娘馬鹿だ、本当に馬鹿だ、遊びに来るたびに語尾に娘はやらんぞをつけるほどの馬鹿だ。本当に馬鹿なんだ。どれくらい馬鹿かわかるか？異常なくらい馬鹿なんだ。

「おじゃましてます。吹雪さん、三月さん。」

挨拶を返すと、視線を感じたのでそちらをみると、穏やかな笑みを持った少年と、同じ年くらいの幼女がいる。

「親戚がいると、聞いておりましたが。」

「ああ、祐樹と舞のことか、今ちよつと用事で出かけていなくてね、娘はやらんぞ？」

「そうですか、あといいませんかから語尾に付け加えないで下さい。」

「なんだとっ娘には魅力がないとでもいいいたいのか！？こんなプリティーな娘をッ！ええいそこになおれ！三時間かけて語ってやらヴァっ！？」

ゴキンッという音を立てて三月みつきさんが崩れ落ちる。

横にいたのはどこからもってきたのか、カナヅチを持った吹雪ふゆきさん。

「あらあら、どうして手に金槌があるのでしょう？」

「さ、さあ？」

大体起こる光景だとしても、正直いって怖い。
この家族はどうなってんだと問いたい。でも怖い。

「いっちゃん！、あそぼう！」

「ん、ああそうだな。」

服を引っ張られて、雪ゆきの言葉を聞いてハッとする。それと同時に雪ゆきに感謝した。

雪ゆきはずっと服を引っ張り続けて…なんで体の皮ごとひっぱるんだ？

「痛い痛い痛い！ちよ、雪ゆきッ！」

「さあいこー！」

気づいていないのだろうか？

「まあまあ雪ゆきったら。」

「いっちゃんのバカ」

「は？」

突然の罵倒に首を傾げると、雪は思いっきり力を込める。

——容赦がない。

「痛い痛い痛いイタタタアア！？」

近づいてみると、容姿が理解できた。栗毛のポニーテールとこげ茶の男としてはちよつと長め。

さて、さっさと挨拶してしまおう。幼女と少年へと向き直る。

「初めまして、有羅場樹あらば じゅといいます。」

「足を舐めるがいいわ愚民」

「…」

「初めまして、三津紅みつ くれなだよ。」

「あ、はじめまして。」

わあ、お兄さん以外とまとも、ちよつとおちよくるのが好きなだけかな？

後ろにいる幼女が何かにらんでくるけどわかんないな、なんでだろ？

「ちよ、ちよつと、愚民が私を無視するなんていい度胸ね！一度は許してあげてもよくてよ！」

「さて、お兄さん、雪^{ゆき}、なにか遊べるやつはあるかい？」

うお…何かプルプルしとるよこの栗毛皇女風幼女
顔を真っ赤にして今にも爆発しそうだ。

「無視…しないでよっ！」

「だが断る。」

即答、幼女啞然。

…フルフルと震え始めたのでとりあえず二歩下がる。

「うがああああああ！」

爆発し…

「コレで勝ったと思わないでよね！」

それで走って逃げていった。

「…変わってますね。」

「うん、由梨を軽く流す君も相当変わってると思うよ。」

確かに。

第四話（前書き）

キーワードははっきりいってしまえばネタバレです。

いままで、『アレ?』と思いながらみていた人はおそらくあと10話くらいで話が切り替わるかと

第四話

綺麗な背負い投げ、投げられながらもそれを実感する。
背負い投げまでの行動が的確の上、簡単に重心を崩されて、そのま
ま力を利用される。

「うおおおひでぶっ！」

「遅いよいっちゃん！そのまま寝技だっ！」

「負けるたびに!？」

「どうも、有羅場樹あらばいつきです。

柔道を習おうと母にいつてみたところ、負けるたびに寝技をかけて
きます。

「いやあああっ！」

「うへへへ、おかーさんの体の味を覚えなさい」

「へエल्पミィー！」

——トラウマになった。

「ねえねえいっちゃん？だいじょーぶ？」

「うん：いつも心配してくれてありがとうな、雪^{ゆき}」

げっそりしながら幼稚園へと向かう。いつもいつも雪^{ゆき}が心配してくれることに、感謝しながら息をついた。
げっそりしているのは母親のせいなのだが、まあそんなことは言わない、というか言ってしまう。

「じゃ、遊ぶか？」

「うん！」

そういつて駆け出していく、平和なことはよきことかな。

幼稚園へと帰ればトラウマ万歳、武術指導だ。

自分の目標のために、だけれど、柔道は恐怖だ。
――主に、自分の純潔的危険で。

「最強にしてあげようっ！」

「母さんがいうとマジで慣れそうでいいよな。」

「というわけで、肉体作りとなるわけなんですが・・・走ればいいんじゃないかな？」

「・・・なぜに疑問符付きでして？」

「ん・・・おかーさんがやったのは『力的に限界なものを体力的に限界までやる』っていうのかな？でもね、力的に限界というものは計らなきやわからないし、体力的に限界も計らなきやわからない。握力筋力、持久力。はつきりいうとこの三点がわからないとダメなのさ。」

「筋力、持久力っていうのはわかるけど、なんで握力なんだよ・・・っていうか握力って筋力じゃないの？」

「さあ？たしかそんなこと言ってたような。」

「誰が？」

「あるえ？」

「・・・」

いつでも思う、この母親は天才だが、ここまで仕上げるのには何かやろうとしたのだ。

―その何かをやったのがこの人の師匠になるわけなのだが―

「誰だっけー？」

「…」

その母親がわからなければダメですよね。…っていうかそれを覚えていない母親ってどうなんだろう。

「まあいいじゃないか、筋力を測ろうッ」

「はいはい。」

「じゃあトラックを片手で持とう！」

「はいh…って待てエエエ！」

いきなりの言葉に突っ込みが遅れた。

トラックって、トラック？ああマラソンの、意味不明だけどそうであってほしい！

「さて、運送屋が近くにあったわね。」

―そうでなかったのは確定した。

「母さんっトラックを片手って無理だったの！」

「え？ん…ああそうだった☆」

「というか母さんはもてるの？」

「ん？うーん、昔は4つはいけたけど、今は1つしかできないかな？」

「何モンだキサマ！」

「親にキサマとはなにさー、寝技かけちゃうぞー！」

ダッ（俺が逃げる音）

ガシッ（俺が掴まれる音）

バタッ（引き倒される音）

「一時間後に延期しましょう」

「ちよ、おまつ、ご近所さーん！誰か助けてー！」

ーsideご近所さん

「あははーいつもいつも楽しそうだねー！」

「そうね、仲の良い家族でうらやましいわねえ」

「そーだねー！」

| s i d e E N D

はっ何か電波がきて、助けなどないと確信できた！

「さて、うへへへへ」

――少々お待ち下さい

「さて、いきましようか」

「…うん。」

運送屋へと到着すると、従業員であろう方たちが整列している

「」「春子さん、お久しぶりですっ！！」「」「」

「やー」

「…母さんは何者なんだ。」

いきなりの挨拶に呆然としていると、後ろでアルバイトの方々がなにをやったんだこいつらといった視線を整列している方々に向けている。

「ちょ、先輩、どうしてこんな子供に頭をさげブアツ!？」

——そんなアルバイトの方々の一名がお星様になってから誰もそんな視線を向けなくなったけれど

「では、壊れたトラックです。」

「うん、ありがとーね。」

「いえっ春子さんのためならっ!」

深く従業員さんたちは礼をする。——母さんは何をやったんだろう。

「じゃ、見ててね。そおい! うああああああああっ!」

——持ち上げた。

ヒョイツというような感じじゃないけど持ち上げた。

「ふうー、主婦やってると腕が鈍るわね。」

「」「それでっ!？」」「」

アルバイトの方々からそんな言葉が発せられたが全員華麗にスルーをみせた。

「さて、いっちゃんもやろう！」

「あ、うん、・・・え？」

「どうしたの？」

「いや、いやいやいや無理ですって。」

「YOU、やっちゃんいなYO！」

「いやそんなノリでやられても。」

アルバイトの方々から『できないよな？できないよな？』なんて視線が向けられる。

「まあやってみますけど。」

「」「やんのかよ!？」」「」

アルバイトたちのツツコミ、だが全ての人間が無視した。

できるわけがない、なんて思いながら近づいてみる。
巨大な体躯、それ相応の重量を見るだけでも感じる。
——いやいやできないだろ。

手をかけてみて、ぐいっと引っ張る。

「ぬおおおおおっぐっ。」

軽く——前輪が持ち上がった。だが、全部持ち上げられるほどじゃない。

それでも驚きのものだ。

「るーべええええええええええええええんす！」

ギリギリと持ち上げ続ける。——いや、それでも驚きだよ。
やめようとする、後ろから声をかけられる。

「やめるな。」

「かあ、さんっ？」

「やめるな。」

「わかったよっ、ふんぬううううううううううう！」

ギリギリと持ち上げる——無理だ

無理だ、無理かもしれない、うん——無理なのかな？

無理じゃないかもしれない

無理っていうものは無意味だ

無理じゃない

無理じゃない

無理じゃない

「ろーるあああああああああ！」

——何か、力を感じた。

無理じゃない

無理じゃない

無理じゃない

『無理、じゃない。』

「「持ち上げたア!？」」

「うあっ、も、無理っ。」

ギリギリな力を振り絞りトラックを置く。

「うんっ、決めたッ」

母さんの声が響き渡った気がする——。

第五話

朝起きれば――

野原のど真ん中にいた。

「W h a a a t ! ?」

「あ、起きたんだねいっちゃん！」

声がしたほうをみれば母さん――母さん？なにをやってるんだい？
縄なんかくくりつけて

「な、なにやってんの？なんでトラックに縄をくくりつけ――なんで俺にもくくりつけられているの？」

「ここはとある山よ。」

「俺になにをしろって言うの！？」

「とりあえずトラックはオモリだから。」

いや、ごめん、話がかみ合わない。とりあえず母さんのいったことだけを整理しよう。

- ・ここはとある山
- ・トラックは重り

うん、わかんない

「俺になにをしろと！」

「走ればいいの」

「ええ：トラックをつけて？」

「うん☆」

うん☆じゃないよ！？というかいっ俺たちはここにきた！起きたっていつてもいつねたんだ俺は！？

っていうかとある山ってだけじゃ不安だ！ここはどこだ！？

っていうかなんでトラックつけてんの！？走れっていきなり何事！？

ああもう突っ込みどころがありすぎてどこから突っ込めばいいかわからない。

「大丈夫☆おかーさんもわかんなかったから☆」

知らないよ！？ってお母さん『も』：だと！？

「母さんもやったのか！？」

「うん、じゃ、やりましょうか。言っておくけど地面につけて引きずるだけじゃ軽い軽いなんて思ってるかもしれないけど。」

「いや、いやいやいやいや！思ってないよ！？思ってるやつがいたら今ここで地面に額をこすりつけて頭を踏みながら謝罪をつけさせるよ!？」

「おかあさんおもっちゃった☆」

「うん、母さんは不思議じゃないね。」

「…チッ」

「(舌打ち!?)」

「てへっ☆」

舌を出して頭をコツンツとやる母さん。

——見た目年齢的にやったら、一部の趣向の方々には『萌え』といわれるだろう。

キュンキュンする人たちが続出だ。

でもこの人は母さん。

はっきரிいうと俺の中でこの行動は

なにやってんだこのおばSドゴンツ…いやなんでもない。うん、目の前の地面が何か殴られたかのように陥没してるとかないよ？

「か、母さん、どどどーしたのかなー？」

「…プチッとされたそうなのがいたから☆」

——これ以上なにか考えたら潰されること間違いなしですか、はい。

「か、母さん！やろう！」

「うれしいわ、いっちゃん！私の愛を感じたいなんて！」

「だが断るっ！」

全力逃走開始だ！

「えうおう！？」

何かにひっぱられ、こける…腰に紐が…そしてそこにはトラックが括り付けられている

「逃げられない…だとッ！？」

「いっちゃん、I LOVE YOU！FOREVER！」

どうすればいい！というかどうしてこうなった！

逃げられない逃げられない逃げられない！

いや、もうあの手の愛情表現とか慣れてるけど、服の中に手を入れるのだけはいただけない！

紐を切るか！？ってワイヤーかよ！

——どうするどうする！

そういえば一瞬だが持ち上げる力がでたよな！あの感覚を思い出せ！

「うおおおおおおりりりりっぺぶっ!？」

走り出したら数cm動いた、だが——そのまま足を踏み外してこける。

「いっちゃーん！」

「またこれかアアア！」

ちよやめっ服の中に手をいれる、うわっちよどk

——過激な描写のために省略します

「ハア…ハア…」

「若返るわー」

疲労した俺と、顔がテカテカツヤツヤした母さんがいた。
若返るって、それ以上若返ったら幼稚園生じゃなんでもない。

「さて、お遊びはこれまでとして、いってらっしゃい。」

「…は？」

「数cm動いたってことは、いくらでも動くってことなの。」

初耳ですお母様。

「だから山を一周すればいいわけさ」

……は？

「二周って…何時間…いや何日かかるんですか？」

「大丈夫、おなかがへらないようにするから。」

「いやいやいや、幼稚園はどうするんですか？」

「そういえばさっきから敬語だよ？お母さんさびしいよお…」

H A N A S H I W O S O R A S U N A

「幼稚園はどうするんですかぁー？」

「さびしいよ、悲しいよ…」

あー、もう駄目だわ

「あーもういくよ母さん？」

「うんっ、がんばってにー！」

いきなりテンションをあげてニパツと笑いながら手を振っている母さん。

はぁ…とそれを見て溜息をついて体に力をいれる。

「ふんぬぬぬ…」

ちょっと、動いた。

……ちょっとだけど

「どないせいつていうんや…」

何故か似非関西弁になりながら、足を踏み出していくことにした。

第六話（前書き）

この小説は
ある程度の世界観とストーリーとキャラクター設定と…ノリでできています。

第六話

春の陽気にあてられて、俺は授業中、ふぁつとあくびをする。

——眠いなあ

高校生となって、すでに三ヶ月くらいだろうか、春は眠気をさそい、最初はドキドキしていた授業も、もはやどうでも良い。

帰ったら何をしよう。

アイツらと遊ぼうかな？

後で聞こうかな

なーんて考えていた前世

そして今、俺はトラックで全力疾走をしている。

——文の脈絡のなさなど今は意味がない。

というか何故こんなことになっているのは本人ですら知らない。

そして今先ほど、全力疾走をしたといったが、3mしか動いていない。

わあい3メートルも動いたよ！

わーいこれなら速いね！

——一時間かけて3メートルだけだね。

「…うふふふふふふ。」

「いっちゃんどうしたの？おかーさんの愛が足りなくなっちゃった

「？」

「いやむしろ多すぎてオーバーヒートしてます。」

さて、俺はいつになったら帰れるのだろうか？

そんなことを考えながらも必死で引いていく。

——もう三時間は経ったのだろうか。

途中から動かすスピードが増えてきたということは、たぶん体が効率のいい方法を自動的に導き出したのだろう。

それでも時速5メートル、亀でももっと速いさ。

「おなかが減ったなあ……」

そういえばご飯ってどうするんだろう？

そう思ったら目の前に母さんが現れた。

——木の葉を撒き散らして。

「忍者かつ!？」

「うん。」

「頷きやがった!？」

突っ込みとリアクションを連続でとるのは、疲労した体にもキツイ。

でもなぜか体が動いてしまう。——なんだこれは、俺はギャグ体質なのか？。

そんなことを考えていれば、母さんが器を差し出してくる。

「おかえりなさい♪、先にご飯食べる？それとも私？それともわ・た・し？」

「ご飯で。」

「あ、間違えたわ。先に私食べる？それとも私？それともわ・た・し？」

「卑猥な上俺に拒否権がないっ!？」

「冗談よ、帰ってきてからにするわ。」

「ああ、うん、いただき、って帰ったらするのかよお!？」

「ご飯を食べるときはちゃんと最初の挨拶をするのが礼儀ってものでしょー？」

「いや、たしかにそうだね、うん、いただきます。うん——じゃ、とりあえずツツコもうか。」

「じゃ私は翻訳の仕事があるからっ!」

「いや待ってうん、待ってくださいっ!」

「待つというものの代償は、一時間おもちゃにされることです。」

「うん、お断り。」

いや、一時しのぎだとはわかってはいるけど、この逃げられない状況でやられるのとは精神的なものに違いがあるんだよ。――結局は変わらないうって？うん、わかってる。

――五日後

「…」

すでに目は虚ろ、というか死んでいる。

精神的にヤバイ、山の終了がわからないせいかもしれないが、おそらく何百メートルかは進んだと思う、だけど山というものはいくらいっても景色が変わることはなく

背の高い木々たちが気分転換に景色をみることさえも拒否している。

たまに、風で飛ばされてきたのだろう紙切れをみるのだが、何語かわからない。

削れてるとかそういうことじゃないんだ。

——何語か、わからないんだ。

ぜえぜえと息を吸って吐き出してを繰り返して、みると丘が見えた。その光に妙に嬉しさがこみ上げる。

ラストスパートのように全力疾走して、そして到着。
見ればそこは巨大な高原だった。

「——外国？」

秋の色に染まっているその高原をみながら、視界の奥に大きな建物があることに気づく。

それを見ようとグッと目に力をいれる。

——瞬間的に視界がクリアになった。
そこにあつたのは城。

「城オ!？」

外国で城があるところってどこだろうか？

わからないな、古城というもののなのだろうか？

だがいまでも使われているような気配がある。

誰か、みえないか？

そう思って目に力をさらに入れると、さらにクリアになっていく。

「人が——いる。」

メイド服を着た少女たちが駆け回っている。

——メイド服なんてメイドカフェの『偽・メイド服』くらいしか知らない。

「はあ…ここはどこなんだ？」

それを知る手がかりは母しかない。

といっても母はこれが終わるまで話すことはないだろう。
幾度としてきいたけど、答えてはくれなかった。

「ハア…」

溜息をつく、背中には哀愁が漂っているだろう。

その時だった。

何か音が聞こえて、周りを見回す。

「だ、誰かいるんですかー？ 母さんだったり？」

そう言って、音がした方向をみると

——クマがいた。

「…ふむ、クマかア…うん、クマクマ…クマーッ！」

意味のわからないことを叫び、全力逃走を開始する。――だってクマだよ？

ねえねえどんな気持ち？
ねえ、どんな気持ち？

「何か幻聴が聞こえたけどそっちのクマじゃない！逃げなきゃ！」

ダッ（走り出す音）

グイッ（ロープが限界長さまでいったことでひっぱられる音）
ズザザザ（そのままこける音）

「うるヴいあああああああああ！（意味不明な叫び）」

クマから逃げようとしたらトラックに繋がれてる今
ねえねえどんな気持ち？
ねえ、どんな気持ち？

うん、最悪だよ！

熊はこっちへ向かってくる。

「武器はあ！武器はおるかー！おおおるではないか、トラックが！
って使えるかボケ！」

頭が変になっているということとはよくわかった。
さて、どうすればいい！もうトラックか！？

「どっせーい！」

浮いた。…それ以上はあげられない。
その感に熊はやってくる。

――腕を振り上げて、飛び掛ってくる。

——死ぬのか？

ああ死ぬのか？

死ぬ？死ぬのかなあ？

死ぬんじゃ——死ぬわけがない。

「死んでたまるかアア！」

その時だった。

力が、あふれ出てきたのは。

「この感覚…いける！」

トラックを持ち上げる。踏ん張り続けて、頭上へと持ち上げる。

「トラックだっ！」

——振り落とすッ！

第七話（前書き）

地震問題、深刻ですね。

募金してきました。

——遺族が死んだ人にインタビューって不謹慎に感じます。

家が流される光景よりも必要な物資の名前などを掲載し、どうすればいいかなどを教えてくれると行動しやすいかと思います。

計画停電は少々不便ですが、いいと思います：が時間が不定期というかそういうのはいただけないんですよね：

さっさと書こうってときに、電源が落ちてデータが消えてリアルで「ふおおあああああ！？」と叫びました。

第七話

「…」

目をして、我が家で横たわる少年がいた。

衣服はボロボロ、心もボロボロ

時節気持ちの悪い『ウヒヒヒ』という笑い声をだしているが、まあ大丈夫だろう

。

——時は二日程度遡る。

—side 樹こしや

「トラックだ！」

そう叫んでトラックを叩きつけると、限界が来たように倒れこむ。そもそもこの力がなにかもわかってないのだ、そんなボンボン使えるわけではな

い。

この一発で決められた！なんてそんなことは思っちゃいないが、力が入らないこ

とに正直本気でまいった。

案の定、クマはトラックを叩きつけられたのに起き上がる。

なんだこいつ、本当にクマなのか？なんて思って、目の前のクマを見——

「■■■■——！」

「（違う、こいつクマじゃない、クマと同じにしちやいけない！）」
熊だと思っていたものの咆哮——それは異常なほどに恐怖を覚えさせるものだっ

た。

怖い、怖い怖い…

ビリビリと地面が震える、肌が震える。

その熊だと思っていたもののオーラというものを肌で感じる。

そして——熊だと思っていたものは、音をたてて変化する。

ゴキッビキッビシィイッ

巨大になっていく体に、どれほどの恐怖を覚えただろうか

「(どうするッ!?!このままじゃ俺は死ぬ!)」

——その時だった。

遠くから、轟音が聞こえ、異常なほどの殺気を感じ取ったのは。

「——!?!」

熊みたいなヤツもそれを感じ取ったらしい、そちらのほうをみている。

逃げ出せはしないだろう、今はその近づいてくる殺気に希望を託すのみだ。

できれば親玉でしたとかそういうオチじゃなく、別の種類で俺を餌にするためにきて、俺をめぐって喧嘩して共倒れになってほしい。

そんなことを考えている間にも音は近づき、殺気もより濃厚になってくる。

「(さて、どってくる——!)」

「いっちゃあああん！」

「（別の意味で俺を餌とする人がキタァァ!?）」

心の中で叫び。助けが来たことに安心し

「私のいっちゃんになにすんだゴルァァァ！」

母親の怖さに先ほど以上に恐怖した。

手にもっているのは、巨大な剣。

勇者の剣みたいなのをもっている。

切り裂くかと思えば刃は寝かせていて、何をする気かと思えば。

「母親の愛の鉄槌！」

メゴオオンツという音をたてて、振り下ろし、熊のようなやつに叩きつける。

——熊は地面に頭まで潰かった。

——絶対に愛の鉄槌だけは食らわない
そんなことを思った瞬間だった。

そんなことを俺に思わせた当事者である母さんは、叩きつけたときにできた砂埃からでてきて、平然と砂を落としている。

そして、きていた体にあまりあっていないコートを揺らしながら、言った。

「子持ちのおかーさんはこれほどまでに強いのよ」

——これが本当だったら全国のお父さんは逃げて欲しい

「――さてっ、いっちゃん。」

こちらを振り向く母さんに、ビクウツと反応をし

「な、なに？」

「トラックがある程度へこんでいるってことは叩きつけたってことだよね？」

「ま、まあそうだけど。」

「その時何か感じた、でしょ？」

「ん…これ？」

ふおんっと体から力があふれ出し、体が淡い白で包まれる。

――感覚的にはかりだけど、体が慣れてきたらしい、どうやるかは、まあ感覚だけど。

「母さん、これなに？」

「『勇気』よ。」

「勇気…って、うーん…一歩踏み出す勇気の勇気？」

「うん、そーだよ。人が踏み出すための勇気。」

「それが、なんで力になるの？」

「それは教えられないなあ」

そうやって人差し指を口に当てて、『しーっ』と息をだす。

——なんかおちよくられてる気がするけど、追求しても教えてくれないだろう

息子バカだけど、やるときはやる母さんだ。

「さて、いっちゃん、その感覚があるってことはもっと楽になるよね？まだ五分の二くらいだけど、あとすこしでできるかなっ？」

「いいともーとはいえないよ…」

「そもそも、その感覚ができてからが本当の修行なんだよっ。制限時間は二日だよ。」

…そんな殺生な。

「いっちゃんに反論の権利は与えられないよ！」

「まっ…いいけどさ。強くなれるんだから。母さんを護るくらい強くなるよ」

「ふふっやっぱり血縁なのね。」

「母さんの血が色濃くでてるってこと？」

「うーうん、違うよ。お父さんのだよ。」

「へ？」

そういわれて、考えてみる。

父さん？——いや、父さんとかいわれても部屋をみたり、母さんの話を聞ければ普通の人なんだけどな。

「お父さんもね、私に言ったわ、『一生ボクが護る』って。」

「プロポーズ？」

「うふふっ。」

そう笑って何も言わずに母さんは去っていった。

「…二日か。」

誰もいない山道で、俺は溜息を吐いて。

「ま、いいじゃないの。」

体は痛いけど、な。

っというか、治療ぐらいしてほしかった。

「――治ってやがる。」

勇気というものが本当に知りたくなった日だった。

第八話

「雪ゆきいゝ平和がきたよお」

「だ、だいじょーぶなのいっちゃん…」

幼稚園の中で雪ゆきの手をとってくると回る。おそらくこれが大人だったら精神科へと連れて行かれるだろう。さて、この一週間をまとめてみせよう。

——トラックを引いて山を回っていた。

…うん、意味不明だ。

帰ってきたときには、インフルエンザということになっていて、雪ゆきが死んだような表情をしている俺の顔を覗き込んだことにより、平和ゆきというものを実感した。

雪ゆきは平和だ。心のオアシスだ。

家が戦場としたら幼稚園児の雪ゆきがいる半径3メートルは、和風のお茶室。

——のほほんとお茶でも飲みたい気分ですな。

「雪ゆき、もう離れない。」

「ふえ！？う、うんっ私も一生離れないよ！」

幼稚園児だからこそ許されるプロポーズまがいの言葉。

——いや、冗談じゃなくて本気なのだけど

さて、家は戦場というたとえをいったが、はっきりいってしまえば、たとえとはいえない。

戦場だ、戦場。平和ボケジャポンの一般市民Aという存在である俺にとってには戦場だ。

気を抜けば寝技をかけられ、トラックをひかされる。問答無用だ。生死を分けた戦いがそこにある！（主に貞操の生死的な意味で）

「雪^{ゆき}ゝなんで母さんはあんなに鬼レベルで強いのか？」

「え？ いっちゃんのおかーさん？ あったことないよ？」

ああ：そういうばそうだったなあ、遊びにいかせれば何かすごいことしそうだからいかせないようにしてたんだ。

母さんは雪^{ゆき}を見た瞬間に「他の女に乗り換えるのね！ 私はお遊びだったのね！」とかいいそうな気が「アナタに：お義母さんとはいわせない：」

……え？

ギギギッという油さしが足りていない機械のような音をたてて、後ろを向くと、修羅がいた。

顔は笑顔、雰囲気は修羅。

「な、なんているんですか？ おかーさま……」

そういえば、にっこりとしながら一枚の紙を渡す。

『授業参観日』そう書かれていた。

「幼稚園に授業参観日なんてあるのか！？」

「しらなかったの？ いっちゃん。」

聞いていなかったというか、幼稚園の行事については無頓着という
か。

家のことについて色々と事が起こりすぎていて、そちらのほうに手
をだせなかったというか。

「…母さん。来るの？」

「いや、来たのさ。」

——今日だったんですか。

いや、まあここにいる時点で気づくべきかもしれないけど…

「さていこうよいっちゃん！ 最高の愛を見せてね！」

ずりずりと襟首をつかまれ引っ張られる。

「うおおおお…なぜだ、なぜ俺は…」

「もうあきらめたほうがいいんじゃないかな？」

雪^{ゆき}…キミって以外とシビアなんだね。

「今日は絵を描きましょう、お母さんの絵をかこうね！」

「「「はーい!!」「」」」

元気だなア：と年寄りじみた事を思いながらも俺はクレヨンをとって描き始める。

最高に才能を活用して書き上げてやろうじゃないか
そう思って集中してみると、教室がある程度静かになっていく。
そうすれば――お母さん方の声が聞こえてくるわけで

「お姉さん?」

「なんでここにいいのかしら?」

「小学生だよね…?」

はっはー、だあれのことなのかなあボクわかんないやー（現実逃避）

「いっちゃんっ!おかーさんがみてるよー!」

「…え？お母さんだったの？」

——よし、よくわかった。よくわかったからこれ以上やめてくれ。

「え、あの——アナタおか？「待ちなさい、鈴木さん」はい？」

誰か母さんに『本当にお母さん？』とでも聞こうとしたのだろうか、それをとめる人物がいた。

ナイス判断だ、なぜとめたかはわからないけど、これ以上言わせれば言ったお母さんがあのアルバイト君みたく星になるだけだ。

「え、あの、何か——？」

「あの人は人型核弾頭という異名を持つ人類最強の人間よ。キングコングを絶滅させたと言われているほどの人物よ。」

：いやツツコミどころの多さは理解できたのですが、それ以前にキングコングって生きていたんですか？というかキングコングって種族の名前なんですか？

「斉藤さん、ご冗談を——ふえ？」

鈴木さんが冗談だと思って笑おうとしていると、その肩を掴むものがいた。

——俺の母さんだった。

母さんは鈴木さんの肩をちょっと引いて後ろに下がらせると、斉藤さんの肩に手をおいた。

にっこり笑って——一言

「しゃべりすぎよう。」

鶴の一声ならぬ、修羅の一声、泣く子も黙る以前に泣く子が気絶する一声を浴びせる。

「すすすすすいませんでしたッ！」

…斉藤さんがガクガク震えはじめる。…母さん。

——そんなことがあったなんて忘れた。

俺はずっと絵を描いていたのだ。うん描いていたんだ、描いていたんだよな？

「ふう、終わった終わった。」

写真のような一枚ができあがって、息を吐く、終わったしのんびりとしていようか。

「終わったの？」

見上げればみゆき先生。コクリと頷けば絵をとってみて——啞然とする。

「すごっ!?!うええええ!?!」

声を上げて、すぐに口を手で無理やり閉じる。
そして絵を返し

「だ、題名をつけましょう。」

そういつてくる。題名か…

「母さんじゃ、ダメ？」

「お母様にフォーリンラブなら最高よ。いっちゃん！」

「…なんで普通に話にはいつてきてるのさ。」

「基本的に描いている子供の側に近づいてもいいのよ？」

そうなの？という視線をみゆき先生にしてみれば頷かれる…事実のようだ。

「じゃ、題名は母さん、でいい」「お母様にフォーリンラヴ」…えつと「お母様にフォーリンラヴ」…はい、それでいいです。」

お母様に恋に落ちる…どんなマザコンかね、俺は…

「うへへへ、愛の言葉受け取ったよいっちゃん！」

「しまった！？地雷だったか！」

「続きは家で！」

続きはWEBで！というノリで言わないでくれ

第九話（前書き）

はつきり言おう！15話で異世界入りとかいう予定を作っていたら、これはもう50くらいいくんじゃないかと！

第九話

「「ハッピーバースデー！」」

そういつてパンパンツという破裂音の後、頭に紙がのり、火薬の臭いがする。

——そう、誕生日だ。

そこにいたのは、おそらくはじめてきたであろう雪と、何故かいる由梨と紅

「はっ、私に祝われることを失神するぐらい歓喜することね。」

「さて、ケーキでも切ろうか。」

プルプルと震え始めた少女は無視をしよう。なにか面白くなってきた。

Sと刻み込まれた扉が開く音がした気がする。

「あゝアアアア！なんで無視するのよオオオ！」

「雪と紅さんと、母さんと俺…四等分だったかな？」

フルフルと震えながら泣きそうだったのでさすがにやりすぎだと思い、フォロー使用と思う。

すぐに五等分をして、顔を伏せている由梨にケーキをのせた皿をコツンツと当てる。

「な、なによっ…あ…」

「ほれ食えよ。」

「コ…コレで勝ったと思わないでよね！」

そうやってフォークを手にとってもきゅもきゅとケーキを食べ始める姿に、なんか和んだ。

——ハッ！？これが萌えというやつか！？

とか思ったけれど、首を左右にブンブン振って忘れることにした。

「いやあ、樹くんは由梨の扱いが上手いねえ」

「ちょ、兄さんッ！？こんなやつになんてことをいうのよ！」

顔を真っ赤にして、ポニーテールでまとまった髪を大きく振って扉を叩く由梨。

それでもケーキを食べるフォークはとめることはない、気に入ったようだ。

「ケーキ、おいしいか？」

「え？うんっ……べ、別にまあまあね！」

いい笑顔で頷き、途中でハッとする。すぐに顔を赤くしてそっぱを向くその姿ははっきり言おう、きゅんきゅんした。

コイツといると俺が変態になる気がする、どうしよう。

「いっちゃんがあ…いっちゃんが女の子をつれてきたよお…渡しはしないわ…」

そしてさっきからその言葉を吐いている母親をどうしよう。

誕生日プレゼント、それは落胆があろうとも隠し続けなければなら
ない人としての価値が試される場所：そんなことをいつてしまえば
誕生日がやりたくなくなる。

「いっちゃんこれー！」

雪^{ゆき}から手渡されたのは手帳だった。なんて渋いチョイス。

「いっちゃんのすきなものってよくわかんないから、いつもつかえ
るやつにしたよ！」

「そうか、ありがとうな。」

そういつて頭をなでるとエヘへと笑う雪^{ゆき}、そしてハンカチを噛んで
恨めしそうにしている母。

うん、幻覚だと思うことにしよう。

まあ手帳はいいな、趣味なんてないに等しい
音楽鑑賞が前世は好きだったが、今は別に好きといえない。

——転生前と後の違いっていうのは結構でてるんだな。

「ふんっ、私からはこれよ、喜びすぎて気が狂って精神科に行くこ

とになるくらい喜びなさい。」

「（結構レパートリー多いのかな？）ああ、ありがとな。」

そういつて渡されて、箱の包みを開く。

——なんだこれ？

「戦隊もののロボットだね。」

紅^{くれない}さんがそう横から口をだしてくる。

——たしかにこの年齢ならば戦隊ものが好きだと思われても仕方ないけど、そんな趣味はない。

「ありがとなっ！」

とりあえず、にぱあとした笑顔をして感謝をつげる。

「由梨^{ゆり}はお年玉全部使って買ったんだよ。」

「ばっバカ兄貴っ！ふ…ふんっ、べ、べつにそんなことはないのよ、お年玉の、そう！一部なのよ！」

「13800円が一部なのかい？たしかおばあちゃんから——むぐっ」

「言うなバカァッ！」

——ひどくがんばってくれたようだ。

由梨^{ゆり}の誕生日にはとびっきりのもの買ってやらなきゃ。

「で、う、うれしい？」

「うん、うれしいよ！結構好きだからね！」

「そ、そう？ハヤトくん最高だよね！」

「そ、そうだね！」

その後由梨ゆりが何かわけのわからないことを話し始めるのを無理やり推しとどめて、紅くれないさんからプレゼントを貰う。

――箱

「ああ、あけちゃだめだからね？」

「え？なぜですか？」

そういうと、紅くれないさんは小さく俺だけに聞こえる程度でいった。

「このロボットの戦隊もののDVDなのさ、戦隊ものを見そうな気がしないからね。すきでも喜ばれるし」

「…ありがとうございます。」

たしかこの人まだ幼稚園児だよな？すごいよな？

そして最後に――母さん。
その手には大きな剣を持っていた。

「勇者の剣っぽいね…」

「勇者の剣よ？」

手渡されて、もってみる。

――重い、トラック一台よりはちよつと軽いけど。
洗礼されたフォルム、神々しい剣だった。

「ぐ…ぐうつ。」

大丈夫、大丈夫だ…
もてるッ！

『勇気』を発動してもってみる。
なんで渡されたんだろう？

「ついでにコレをポチッとやれば腕輪に。」

「どういう原理だ…」

「これを毎日もっててね、ついでに腕輪になっても重さは変わらないから。」

――修行ですか。
そう思って母さんをみると、頷かれる。

「ああ、同年代の子がおふざけでも触らせないようにしようね。間違っても抜き取れば大惨事だから。」

『これなんだよ樹ふしぎ』

←

『よしとったぜってあぎゃあっ！』

←

そして肉塊に――

「うん、本気で死守するよ。」

「うんうん、それこそ私のいっちゃんだ。」

そういつて笑う母さんを見ながら、誕生会は終盤へといった――
12月の、寒い時期のことだった。

第十話（前書き）

ひとつ聞きたいんですが
幼稚園って

年少

年中

年長の三つですよ？

記憶が曖昧なのですが…

少年漫画という言葉を入れようとしたら野菜王子を思い出してしまった。

GTは邪道ですか？

第十話

年が過ぎ、学年とっていいのかはわからないが、年中組となりました。

組はチューリップ組。

一年というものは意外にも速く、光陰矢のごとしということわざを思い出せばたしかにそうだと思うばかりです。

——どんな始まりをしているんだ俺は
まさしく現実逃避を開始している。

「はあっ！」

「ひでぶっ！」

今やっているのは空手。柔道もやってはいるが、やることを追加してもらった。

空手、空手だ。

柔道は負けるたびに寝技をかけられてはいたが、今度は何をするのだろう、などと思って聞いてみれば、差し出された数字は『1』

『いっちゃんが私の攻撃をくらったらかおかしさんタイムを一分追加しますっ』

という言葉が母が仰られ、『一分程度か、甘いぞ母さん!』などと思っていたのは今となっては後悔しかない。

昨日は127本とられた。

――二時間七分

その数字はあまりにも大きく。頬をひくひくさせながら舌なめずりをしてやってくる母親に恐怖した。

最初は良かったんだ。

『ちゃんとした形でやらなきゃ、それで戦い方を体が作っちゃう、だから最初は基本的動作だよ!』

といって、最初は空手の基本的な技をひたすら一週間繰り返され続けたわけだけれど。

組み手が始まってしまえばあちらのもの
ぽんぽん撃たれ続け、拳句の果てには100を越え、じゅるりじゅるりと舌なめずりする母さんは最早自重という言葉を知らず。

「ひでぶっ」「あでぶっ」「まげろっ」「らりばっ」「あべしっ」
「おどうるっ」という叫びを上げながら母さんの攻撃を受け続け疲れ痛む体に『おかーさんタイム』を開始する。

――トラウマがまたひとつ追加された!

そんな機械音が鳴った気がするが、ただ言いたい、嬉しくない、嬉

しくないよ。

もう、幼稚園での雪が癒しだということは決定事項になりそうだ。

――そして疲れた体を引きずりながら布団へと入り睡眠へとはいる。

――そして岩山にいた。

「またこの展開かよ!？」

「あ、おきたんだねいっちゃん！」

「またその台詞かよ！そしてまた縄にくくりつけられてるのかよ！
？なんでくくりつけられてるの！？」

「フフフ、いっちゃん、今日は岩をぶち抜いてもらおうよ。」

「いい加減ここはどこだか教えてよ！」

「くくりつけてるのはあまり出歩かれちゃ、またあのときみたいに
襲われたときに対処が遅れたりすると困るからだよ！」

——あ、ダメだ、このパターン：絶対に話がかみ合わない。

『ここはどこ？』という質問についての返答は諦めることにした。
とりあえず母さんのやらせたいことを聞いておこう。

「で、ぶち抜くってどういうことさ。」

「こ・れ♪」

そうやって片手で持ってきた岩は、二メートルはあるかと思われる大岩。

岩をぶち抜く岩に困らないための岩山らしい。

俺はその岩の目の前で力を入れて、突きをする。

鈍い音になって岩がバラバラとなる。拳がさすがにじんじんと痛む。

「ぶち抜いたけど。」

「それは、『ぶっ壊した』っていうの。ぶち抜くことが大切なの。」

「…わかんないなア…」

「一点集中にして、突き抜く、その上にして拳を強くする。それがこの修行！」

よくわかんないけど、わかった。

強くなればいいんだな！。

「よっし！もうやけくそで頑張るぞ！」

もうココはどこだとか無意味だと知った！

母さんに何をいっても返って来ないのは明白！

さあやってやる！

「母さん、じゃあやるよ！」

「さすが私のいっちゃんだ！じゃあはい！」

「…なにこれ。」

渡されたのは――鉄の輪。

「ひとつトラック一台分それを四つつけて一人前」

何に対して一人前になるの!?

「か、母さん?さすがにキツイんじゃない?」

「キツイことをひたすらやるのが強くなることなのよ。どこぞの少年漫画の野菜みたいな名前の王子様だって努力して強くなったんだから。」

「ブルーツ波とかいうの使ってるじゃないか!」

「いっちゃん、これ以上言うとか丸一日おかーさんタイムよ。」

「ごめんなさい、ゆるしてくださいッ!」

――そして俺の修行は始まった!
たたかい

「いまさらだけどこの鉄の輪って何でできてるの？」

「おかーさんの愛だよ！」

重いということだけはあってる気がする。

第十話（後書き）

この小説がはっちゃけすぎて

もうひとつの暗い小説が書けないんですよね：

心をスイッチを入れるように切り替えられるわけでもないし：

そもそもその小説のデータ消えちゃって再構成しなきゃいけないし：

うん、とりあえず異世界編くらいまでいったら更新をちょっと遅らせます。

楽しみにしてくれる人がいたら幸いです。

第十一話

「どっせい！」

「おりゃああああ！」

「ぶううるわあああ」

「おんどりゃー！」

「うおおーっ」

拝啓お母様、未だにぶっ壊してしまうのですがどうしたらいいですか？

力任せにやるんじゃダメだと思い、一点に集中するように打つてみますが、打撃とは波紋のように広がるもので、碎けてしまいます。ぶち抜くってどうしろと？

「そもそもぶっ壊しているだけでもいいと思うのは俺だけだろうか？」

岩を破壊するなんてどこぞの漫画の筋肉キャラだよ。なんて思いながら額に手を当てて溜息を吐いた。
いい加減疲れた、ちょっと休もう。
ヤケクソでやること事態間違っているのかもしれない、頭を冷やして今一度考えてみよう。

そう思ってその場であぐらをかいて座り込む。

「うーんむ…」

一点集中っていうのはいいと思うんだけどなァ…攻撃してしまえばどっちにしろ威力は広がっていくし…

そうだッ！拳を半円にするんだ！

岩に向かって口となるような半円を拳で描けば、円内に力がたまるんじゃないかな！

「そうときまればさっそく…痛たたたたっ!？」

——ですよねー

「…なにやってるのいっちゃん。」

母さんの声が聞こえ上を向けば、そこにいたのはやっぱり母さん。呆れ顔なところが何故か無性に腹が立つ。——おっと、これは絶好のチャンスというやつでは!？」

「ねえねえ母さん母さん。」

「なにいっちゃん？頼みごとはおかーさんタイム二倍よ？」

「大きすぎだよ!？」

「お母さんの時間を奪う代償はそれくらいなの。」

「息子に愛を!」

「いっちゃんがもっと欲しいなんてっ!…じゃあ二倍…っ」と

「いやもういいですはい!二倍でいいから岩をぶち抜いていただけるとうれいすはい!」

もう何を言おうとも二倍コースからは逃れられないことは確定した。OKいいだろう、二倍なんて耐えてしまえばいいのさ。

「じゃーまた二倍、よかったねいっちゃん！お母さんの愛がもつと
感じられるよ。うへへ。」

そういつてさらに二倍された、
——ですよねー

スキップしながら、母さんは岩の目の前にいくと、ふっと息を吐く
と肩より上に腕に振り上げる。

「すっ」

息を少し吸い——

「破ッ！」

瞬時に吐いて、上から岩に攻撃する——
ドオンッという音をたてて——岩より後ろに轟音をたてた。

「は？」

何事かと思い、岩の後ろをみれば、岩の槍のようなものが突き刺さ
っている。

——岩をみれば、穴が開き、後ろがみえる。
ぶち抜いた、というのが完璧に当てはまっている。
それが完璧な状態なのだとすぐに理解でき。

「（こんなんできるかつ！?）」

とりあえず心の中で叫ぶ。

「コツとかないの!？」

「じゃあ二倍…っと」

ええいもうOKOK! いいだろう畜生め!
ああもう母さん、涎を拭きなさい! なんか怖いから!

「コツは…力を一点集中することかな？」

「いや…もうそれやってるんですよ…」

「力っていうのはたくさんあるじゃない。いっちゃん♪」

「——力…あ…あぁっ!」

「わかったようだね？」

『勇氣』か!

そう思い立ち、俺はすくっと立ち上がる。
腕に勇気をまとわせて、一点集中。

「フハハ! この私に不可能はないッ! せいやああああ!」

ドゴォンッ! (岩が破壊される音)
ガラガラ… (粉碎して破壊された岩が崩れていく音)

「……フッ」

「恥ずかしいiiiiiiiiiii!」

俺今不可能はない!とかいっちゃったよ!?!どこの中二病だよ!

それで失敗しちゃ元も子もない!

ハッ!母さん、母さんはみてないよな!?

そう思い、見回せば母さんの影はない。

――よし、大丈夫だ。

母さんはたぶん、俺に教えにきてくれただけなのだろう、やれやれいい母さんだな。

「ふう…よかったよかった。」

独り言をいいながら恥ずかしさを紛らわす。とりあえず勇気というヒントは得た。

これからどうするか、だ。

「使い方を試行錯誤すればいいのか？」

とりあえず母さんが貫いたときにでた石の槍のようなものをみよう。そう思い、近づいて：『ガチャンッ』：これ以上いけない？

——あれ？：って鎖か：あとちよつとなんだけどな。

「ふんぬぬぬっぐぎぎぎぎぎッ」

鎖は伸びることはないために、目に力をいれてみる。——形的には、らせん状になっている——らせん状か。

——つまり。

「つまり、円を描く：か。」

そう思い立ち、すぐに勇気をまとわせ、円を描くように力をみれてみる。

「っ——できた、か？」

ぎこちないものの、できあがったものは円、正確には楕円だろうが。それをみて、ちよつと嬉しそうにしながら、構え——ぶち抜くッ！

「はアアアア！」

轟音――

崩れる音は…なかった。

第十二話（前書き）

どうせだから

オリジナルオンラインゲーム

←

異世界（キャラクター設定そのまま）

というオリジナル小説を書き始めた結果、メモ帳でとりあえず保存しておくことに決めた。

——ココに置こうかな？と思ったけどやめることにした。

——はじまりがシリアスっぽくっていうものができなかったし

第十二話

机を叩けば鈍い音。

そして練りだすは、覇気。

さあいこう、母さん。

俺の全てを叩きつけてやろう！

いくぞッ！母さんッ！

「というわけで俺は絶対に母さんについて聞くまでは絶対に部屋からでないからっ！」

何かほほえましいものをみる目をされた。

「ま、教えてもいいんだけどね。」

そして俺はその言葉に思わず芸人のごとくこけた。

「つていいのかよお！？」

「ま、隠すことじゃなーいしー、いつか実感することなの。」

「ええーなんだろう今までの意図的にその話題は避けられていた感じがするのは。」

「うーん、できれば『その時』まで知って欲しくなかったっていうか。」

「へ？なんで？」

そう言えば、母さんはちょっと考え込んで、ふうつと息を吐く。

「ま、いいさ。」

その言葉に適当だなあという感想を抱いたが口にすることはない、教えてくれるっていうんだから機嫌を損ねるわけには行かない。今は聞くことのみを目標として言葉を動かしていくべきだ。

「じゃ、教えて。」

「えっとね…うん、私ってば異世界の人間なの。」

——What?

I S E K A I ?

いやまてこう考えろ。

『俺ってそもそも転生者なんだから、異世界ぐらいあってもよくないか?』と。

というか母さんと俺、どっちとも同レベルの不思議パワーを秘めているだろう。

「そして魔法少女だったの。」

——あれ?なんか複雑だ。

フリフリな服きて、『魔法少女春子!』って感じか?

いや、名前が普通すぎてまったくつりあいかとれてないだろ。

いや、その前に『魔力』を使えよ、『勇気』とかじゃなくて

いやもしかして『勇気』というものは『魔力』の別称的なもので、

『勇気』魔力』ってな感じか?

「そして今も魔法少女なの。」

「年を考えろろろろ!?!」

ツッコミをいれようとすれば、目の前に剣が突き刺さる。——一歩間違えれば死んでましたよ母さん。

驚きのあまりへんな声をあげてしまったじゃないか。

「まあ、冗談なんだけど。でも今も少女ってのは本当ね。」

たしかに少女だな。——胸がまったくないもなんでもないですごめ

んなさい。

指と指の間に刃物を挟んでいつでも投げられる体制にしないでください。

「おかーさんの愛が欲しい？」

もはやその言葉が脅迫でしかありませんお母様。

「ま、冗談なんだけどね。」

——今までののはなんだったんだろう。

「母さん、真面目にしてよお。」

「いっちゃんがお母さんとお風呂をいっしょにはいってくれたらいいかな？」

「いや別にいいけどさ。」

言っておくが、前世を引きだして、『ロリコンッロリコンッ』という脳内の俺がいるが、それを押し殺す。

「じゅるっ…女の体ってものを教えてあげるわ…」

「いや、そんな体系じゃなんでもないです。」

「うん、いっちゃんはいいい子だね？『ね？』」

「は…はひ…で、でででは、よろしくです。」

「いっちゃん、どのくらいおいしくなったかな☆」

——最近あの熊よりも母さんの方が怖いんだな、って良くわかった。母さんはあれだ、中学生になってもあんなことやるならもう犯罪だ、ただでさえ思春期にやられたら：

「ロリコンって言われても仕方ないかもしれない…」

「うん、いっちゃん、とりあえずアナタを今から愛すわ。主に半日。」

ダッ（走り出す音）

ガッ（掴まれた音）

ドサッ（引きずり倒される音）

「おいしくなあれ☆」

「いやあああああああ！」

ツルツルテカテカと光る母さんはスルーする方向で、死んだ目をした俺はなんとか精神を戻し、母さんにきいた。

「なんというか、断線しましたが教えてください。」

「うん、とりあえず私異世界人、それはOK?」

「あ、うん、わかった。」

もう転生人なんて俺がいるから、異世界なんてごまんとあっても不思議には思わないほうがいいと判断した。

「で、私お姫様なの。」

「――母さん、ちょっと精神科医にいかがか。」

「いまいっちゃん普段私のことをどう思っているかよくわかった気がするわ。おかーさんタイムは今までの二倍激しくするわ。」

「今よりさらにやらないで!？」

これ以上やったらおそらく死ぬ（精神的な意味で&世間的な意味で）

「大丈夫、怖いのは一瞬だけだから、あとは少しガマンすればちょっとずつ良くなってくるから。」

「ちよつとずつ変態になるよ!？」

まったく、母さんに弄られて良くなるなんて変態でしかないじゃないか。

——自分の力とか変態レベルだけど、それはスルーしてしよう。

「脱線はやめて率直にいうとお姫様『だったの』で異世界へと来たの?」

「なんで?」

「魔王っぽいものに滅ぼされたのよ、国が。」

…うんやっぱり精神科に行くべきかもしれない。

「うん、いっちゃん?子機なんかとりだして。番号を押そうとすれば『その指ごと愛すわ』」

「もうすでにそれ脅迫だね、母さん。」

「溺愛してるからこそできる芸当なのよ。」

うれしくない、うれしくないよ母さん。

「ま、それはいいのよ。」

「うん、まあどうでもいいね。」

利害の一致、ちょっと違うかもしれないけど、とりあえず今までの話題はスルーすることにした。

「とりあえず滅ぼされて逃げ回ったら異世界っぽいものにいったわけよ。扉っぽいものを開けたわけ。」

「うん、そうなんだ。すごいすごい。」

「わが子ながら腹が立つの。でもおいしそうだから許しちゃう。」

うん、無邪気に答えよう。母が怖い。

「で、逃げて——お父さんに会って——結婚したの。」

「戸籍とかは？」

「大丈夫、裏の人間脅迫すればけっこうできるの。」

「うん、聞きたくなかった。」

「で、あなたが生まれた……と。」

うん、うん……で、とりあえず聞きたい。

「母さんでも倒せないなんてどんな化け物だよ。」

「いや、はつきりいっちゃえばその時私弱かったし。」

「じゃあ今いけばいいじゃないか。」

「：子がいるのに、死ぬかもしれない場所にいく親がいますか、まったく。」

：愛されてるなあ、俺。

なんていうか、うん、痛いし重いけど。

「じゃ、俺がいく。」

「それは止めはしないわ。結局自由奔放に生きてもらうから。自分で決断して、自分で行動する。それができるからこそ大人なのよ。失敗を恐れないで、失敗からさらに高みを目指す。失敗は成功の母、そして失敗から学ぶのも人生で必要なのよ。：ま、何も説明しないで『やれ!』っていったって、その失敗は成功にもならないけどね。それを上手くするのが大人の役目かなあ。」

「うん、ちゃんと大人やってるようで安心した。」

「ぶっ：いっちゃんにそういわれちゃあ御終いね、お母さん。」

そういつて笑った母さんの顔は、嬉しそうだけど悲しそうだった。

——その顔で、充分本当だってわかったよ、母さん。

だから

第十三話（前書き）

いつきに飛ばします。

キングクリムゾンッ！と叫んでくれると嬉しいです。

自身を明かし、主人公は強くなり続ける――
それからは強くなり続けるだけです。

第十三話

「えー、それでは――」

話し声が、聞こえる。

二度目の高校生活の始まりを告げる鐘が聞こえた気がした。

高校、俺が入学する『桜岬野高校』は地元で有名な進学校の高校だ。いま話しているのはこの学校の校長、今は入学式だ。

母に『俺が行く』と宣言し、ここまで頑張ってきた。

『母さんがOKといえるならいかせてくれ』という約束のもと俺は必死になって母さんに挑んできた、未だに絶対に勝利できるというほどではないが、ここまで頑張ってきた、完璧になったというほどの自信はないが、しかし、ここまで勝てるようになったということに俺は誇りを持ちたい。

「――それでは、これで入学式を終わりにします。」

考えていたら時間が立っていたようだ、すでに入学式は終わりの挨拶を迎えている。起立をし、礼をする。

新入生たちが続々と外に出始め、それを先生たちがまとめようとしている。

「いっちゃあん！」

そういつてかぶさってきたのは雪^{ゆき}。長くした髪の毛がかぶさってきて、それをはらって雪の腰^{ゆき}のほうでカラダをもって、ゆっくりと地面へと置く。

「まったく、俺への対応は変わらないんだな。」

そういつて笑うと、雪もエヘへと笑う。

——雪も成長した。女らしい体つきに——セクハラっぽい言い方をした、うん：綺麗になったとでも言おうか。

「いっちゃんは私のものよ！」

「母さんも変わらないよね……」

そういつて見るのは、未だに小学生体系な母さん。

——これで人類最強といえる人物だ、……成長期はいつだ。

自分のクラスの担任であろう教師の声が聞こえたので、母さんに手を振って雪と共にそちらのほうへと向かう、雪は同じクラスなのだ。

「まったく、本当に腐れ縁というものかな。」

「えへへ、由梨ちゃんは違うクラスだけどね。」

そういつて腕に抱きついてくる雪：スキンシップが妙に過激な上に、うんと、その……身体も大人になったわけで、む、胸が……

だああああ！俺はもう精神は30を超えたおっちゃんなんだぞ！？何を純情まっさかりな反応をしているんだ俺は！？

「？、どうしたのいっちゃん？」

「いや、なんでもないさ。」

そういつてごまかすと歩く足を速める、それに雪もついてくる。さて、さっさと行こうかな。

「…あんたたち本当に仲がいいわね。」

そういつて呆れたような顔をしてくるのは由梨、顔は呆れているが、ちよつと口が尖っている。不満そうにしている顔だ。——おそらく雪は親友のようなものだから、とられたように思っているのだろう。だがそれに雪は気付かないようで、その言葉にもえへへと笑うだけだった。

「ぐ…確信犯ならとんだ策士といったところかしら。」

そういつて顔を歪ませる。——その反応について合致しそうな答えはみつからない。

まあいつものことだし、スルーしていいだろう。そう判断して俺は由梨に笑いかける。

「よっ、初と同じ学校だな。」

「ふんっ、ここの高校の偏差値は結構高いのよ？ 武道や武術ばかりやっていたあなたがこの高校には入れたカラクリを知りたいものかわ。」

「えへへ、いっちゃんは天才なんだよ！」

…まあその通りだ、前世の俺だったら『その通り』だ、なんていつている俺にイラツときているところだが、まあその通りだ。

「基本的に人外最強だから今更どうこう言うわけがないけどね。」

「お、おいおい…人外最強とか少しオブラートに包んでくれないかな？」

「そうね、今の状態はオブラートという布があつたら200枚かぶせてあげたくらいのものだけどね。あぁついでに言うとな、オブラートを取ったら化物よ？」

「うぐ…」

「そのうえマザコン。」

「げふうっ!？」

精神的にダメージをザクザクとくらわされ、その場に膝をつく、胸を押さえながら由梨ゆりを見上げる。なんとか反撃を喰らわせなければさらに追撃を食らわされる!。

「こ、この毒舌ツンデレお嬢様め…」

「だ、誰がツンデレですって!？」

「毒舌は否定しないのかよ…」

「むう…いっちゃんと由梨ゆりちゃん楽しそうだなあ。」

「ど、どこがよ!？」

「一方的に俺がいじめられているだけだよ、雪^{ゆき}。」

「あ、あんたねえ…」

そういった受け答えをしていると、名前を呼ばれる、名簿でいるかどうか確認しているようだ。

それをみて、俺は大きく返事をして、由梨^{ゆり}に声をかけて雪^{ゆき}と共にはいっていった。

由梨^{ゆり}は少し寂しそうな顔を見ると、自分のクラスへと入っていく。そうして入学式の日は過ぎていった。

「ただいまー。」

玄関脇に鞆を置いて、俺は軽く伸びをする。

今日と言う日も滞りなく終わった。

中学時代にでもやめることはなかった『おかーさんタイム』というものは、さすがに高校生になったのだからやめるべきだと思い、すぐに構える。

「…母さん？」

——いつもなら『いっちゃーん！』っていいながら走ってくる母の影はない。

どうかしたのか？と思い、靴を脱いでリビングへと向かう、靴はあったのだ、どうせ寝ているのだろう、仕事が詰めの段階にはいって、寝ないで頑張っていた次の日も『おかーさんタイム』は無かったわけだし、確率は本当に小さいがそういうこともあるわけだ。

リビングへいってみる。——母の姿はない。

「む…部屋か？」

そう思い母の部屋を開けてみると——いない。

片っ端から部屋を探してみる、母の過去を知っているからこそか、少し焦ってくる。

魔王っぽいもののやつに攫われたとかないよな？なんて考えてしまう。

「母さん！」

——結局いなかった。

靴はあるというのに、なぜだ？そう思って色々と探してみる。

かくれんぼなんて今更母はやらないだろう。

だからこそ探さなきゃ。

そう思ってリビングに再び戻ってきて、見回すと机に手紙があった。机にある、これでも母は整理整頓が好きなほうだ、そのうえ朝には無かった——つまり本当に最近置かれたものだ。それを拾ってみると手紙。

開いてみることにする。

「…なんだよこれ。」

書かれていたものは、母さんの文字。
そして書かれていた言葉は

『ごめんね』

それ、ただ一言だった。

「なッ：んでだよオオオオ！母さんッ！」

その一言で――

全てを悟った。

剣を渡してくれたのに、稽古をつけてくれたのに、母はいつてしまった。

守りたいと願った対象が目の前から消えた。

俺はすぐに走り出す。家を探し続けることに決める。

「ちつくしよおおおおおおおっ畜生っ！なんで、なんで――」

思わず涙がでてきた、異世界、異世界だ。

異世界へ行かなければならない、異世界異世界異世界異世界ッ！
行く方法は？わからない、わからないのだ、でも行かなければならないッ！

探し回る、探し回る探し回る探し回る

だが何も出て来ない、異世界の道もない。

靴はあったのだ、つまりは部屋の中にあるということだ。

そもそも修行といって山や野原に行かされることがあった、つまりそれは異世界の可能性が高い、そもそもそんな攫われるようなことをされて俺が気付かないわけがない。

車というのは揺れがある、どんなに母さんが上手くはこんでも無理だし。そもそもあんな場所、こんな都会まったただ中などころにあるわけがない。

ではつまりはどういうことだ？つまり俺は異世界へといったということなのか？

少なくとも近い場所ということはわかる。

あんな広大な平原や城、そもそも途中で拾った紙から日本ではないことは推測は簡単に可能だ。

では外国にいけるか？答えは否ッ！どんな移動方法でも可能だし、日にちを測ってみると、移動には一日もかかっていないことはわかる、俺は異世界にいった！方法はわからないがいったんだ！

少なくとも家、もしくは家から近い範囲内の場所から！

「チックシヨオオオオオオオオオ！」

見つけれない自分に不甲斐なさを感じる。だが、見つからないのだ。

そのまま俺はベッドへと倒れ込む。

涙が止め処無くでてくる。

そのまま外を見る、そして立ち上がり、使われていない部屋に入っていく。

——物置部屋となっっているこの部屋へと入り、俺はそこを見回した。そして見つけたのは——

「なんだこりゃ？」

布をかぶせられそこに忽然と置いてある鏡。

その鏡の布をとれば、そこには何も写らない。

明らかにあやしい、トンツと手をおけば鏡が水のように揺れた。

「これはまさか…そおそおおい！」

そして俺は迷わずダッシュで走り、鏡へとダイブするッ！

「ひでぶっ!？」

そしてそのまま鏡にぶつかって倒れた。

第十四話（前書き）

あ…ありのまま今起こったことを話すぜ

『どうせ人なんてあまり来てないだろと思ったらポイントが700
超えてアクセスが10万突破していた』

な…何を言ってるのか わからねーと思うが
私も一瞬何が何だかわからなかった

…無理やりやって失敗した気がする。

第十四話

「ほおわたたたたあつ」

カカカカッという甲高いとも鈍いともいえない音を立てながら、波打つ鏡に連続攻撃をし続ける。だがそれは鏡に全くの傷一つ付けず、波打つばかり。

「ほおわちやああああああつ！」

最後の一撃は力を込めて、食らわせれば鏡は…何の変化もない。
——ブチッと頭でなにかが切れる音がした。

「ジーザスッ！ジーザスッ！」

その鏡を掴み、振り回すこと数分、ぜえぜえを息をきらせながら鏡を置く。
嫌になっていることがよくわかる。でも諦めたらそこで試合終了なのだ。

「勇気を手に凝縮し…突貫するッ！」

勇気を手に凝縮し、手を槍のように先をとがらせる。
そのまま一撃ッ！

ガッ

その一撃は鏡に直撃し――

ヒュウッ

見事に直撃した威力のために鏡は吹き飛び――

パライインッ

鏡は窓をつきやぶって吹っ飛んでいく！

…
…

「ほおわあああああああ！？」

意味のわからない叫びを叫ぶ。

そのまま走り出し、窓の縁から走り込み、窓をキャッチ、そしてそのままた下へと落ちて行く。

「ゴベパツ！？」

重力という自然の法則に逆らわずに加速し、地面へとぶつかる――痛い、が――すぐに回復して起き上がる。

景色は変わらない、そのことにため息を吐いて、新品の制服についた土埃をはらい立ち上がる。

足取りは――重い、何もできない無力さに打ちひしがれて、俺はそのまま家へと戻る。

「…何もやれないじゃないか、強くなった気でいただけじゃないか。」

リビングのソファにカラダを預け、ボソリとそういった。

目から入ってくる夕陽の光がとてつもなく悲しく感じる。――何もできない

「そんなことは――ない、勇氣とは、勇氣があるからこそその力…」

諦めなければ、何かしら力を使える筈、あきらめてはダメだ。

勇氣という力は言ってしまうえば俺が使える唯一の『規格外』可能性が無限にある能力。

だからこそ今ここに可能性があるというのに、俺は今現在無力感を

感じるしか無い。

頬に温かいものがツウツと垂れるのを感じた――。

次の日の朝、気だるさを感じながらも学校であろうとも思考はできる。

一睡もできなかった体を引きずり、軽目の朝食をとって俺は鞆をひつつかんで外へとでる。

向かうは学校、心の中で雪ゆきや由梨ゆり、紅くれないさんが何かしら案をだしてくれることを願ってしまっている俺がいることを感じながら俺は学校へ着いた。

到着すれば雪ゆきが抱きついてくるので、いつもどおり腰をもって地面へと置く。

「ちょっとぐらい対応を変えようよ……」

「えーいっちゃんも変わらない…大丈夫？」

俺の顔を見て、雪ゆきが心配そうにしてくる、そんなに変な顔でもしているだろうか、ずっと考えていたために歯磨き中も鏡を見ていないことを思い出す。

「あー、ちょっとトイレ。」

心配そうにしている雪の視線から離れ、トイレへと向かう。
そして鏡をみて、苦笑した。これじゃあ心配するものだ。
限ができ、一晚程度だというのにゲッソリしている、母がいなくなっただけでこうも変わるものか、…ふう、と息を吐いて俺は顔を叩く。

元気を出さなければいけない、そう思って俺は目にぎゅっと力を込めて鏡を通して俺をみる。あの鏡のように波打つことはなく、先ほどもよりも引き締まった顔である自分が見え、少し笑みをこぼした。もどってくれば雪にニツコリと笑われ、ひきしまったよ、と言われたときは、ああこいつは幼なじみなんだなと実感した。

最初の日、授業という授業はなく、先生が一人に一年間を通してやる授業というものを説明している。

それを聞き流しながら、昼休みが到来し、俺は由梨と雪の前でなにげない一言のようにつぶやいた。

「なあ、ゲームでよくある異世界の扉ってどうやってあけるのが普通なのかな？」

そう言葉を出せば、なにいつてんだこいつという感じの顔をした由梨に苦笑した。

——まあそうだろうな、なんて思いながらも二人をみる。

答えて欲しいんだな、といったことを理解したようで、由梨はちょっと考えてみる。

「なにかの鍵とかじゃない？ なんとかパワーって感じ。」

「うん、由梨ちゃんと同じだよ、選ばれし力とかそんな感じ。」

「で、そのなんとかパワーと手に集めてその扉にぶつけてみても開

「かなかったらどうするべき？」

そう聞くと、由梨ゆりはなにいったんだこいつという顔をさらに深める。
そして次の一言が、答えだった。

「いや、そもそもなんとかパワーで開くんだったら押し流すもんじゃないの？」

「……………」

「……………」

「……………」

長い長い沈黙が巻き起こり、俺は口をぽっかりと開けながら、その言葉を発した由梨^{ゆり}を、油差が足りていない機械のように鈍い音を立てながら首を動かし、見る。

「な、なによ…」

俺のその反応に、ちよつと由梨^{ゆり}は引いて、俺の思考回路はぐるぐると回っていた。

っていうか俺、本当にバカじゃないの？なんなの突貫とか恥ずかしい。鏡が吹っ飛んだだけじゃないのさ。

…まあ自虐はもういいとして

「あんった最高だアアタルブツ!？」

思わず由梨^{ゆり}に抱着^{ゆき}こうとして何者かに気絶させられた。

…おそらく雪^{ゆき}だろう、女は強いってことを見せつけられた気分だ。

——気絶しながらも、俺の顔は穏やかだった。

さっそく家に帰って、鏡の前で俺は集中する。
手のひらに放出するような感覚。

目を瞑れば白い世界が広がっていく。

「（行けるのか？ いや、行くんだ、行ける——）」

息を吸い、吐く

俺は暖かいなにかを手のひらに感じながらも、その手のひらをゆっくりと鏡へと叩き込む。

そして——おし流し、目をあける。

そうすれば、叩き込んだ手のひらはずぷり、と鏡のなかに吸い込まれていく。

水面のようだ、と感じていたがその通り、入っていった手のひらは水の感触を感じ、俺はそのまま——一気に力を放出し——突撃した。

水の揺れる音がして、部屋には人の影はなかった。

第十五話（前書き）

遅れちゃってすまねえな

でもその遅れはいまから取り戻すぜ！

といいつつ次回も結構期間開きそうですよね

あ、ついでに旅行で遅れました

娯楽で顔文字はいいと思うけど、こういった多くの人々が見る場で顔文字は使わないように心がけていますが、あまり気にしないほうがいいんじゃない？と言われました。

どう思われます？

今回は戦闘です、正直自信がないので、アドバイスして下さいとうれしいです。

第十五話

「うおおっ!？」

何か擦り抜けたときの感触とともに、落下。

そしてそのまま音をたてて水へと落ちていった。

ドポオンツという音をたてて水しぶきをあげて落ちた後、すぐに酸素を求めて上へとあがる。

「な、なんだったんだ…」

ゲホゲホツと水を飲んでしまつてドロ臭くなった口に顔をしかめながら水を吐き出す。

周りをみれば煉瓦造りの壁がある、そして今いる場所からぐるりと周りを見回すと、俺がいまみずに浸かって居るのは、噴水だということがわかった。

おそらくはその噴水に飾ってある、女神…だろうか? そんな雰囲気漂わせる像が持っている、鏡のような…いや、なにも写さないところから見ても、あの鏡と同一のようなものだろう。

「おそらく、あそこからでてきたんだな。」

そう思って、すぐにその噴水からでて、服を絞り、水気をだし、脱いでパタパタと風にさらす。制服は、防水処理というものを使っている、濡れたら乾きにくい上にペトペトと内部の生地がはりついて、濡れたらかなり気持ち悪い、火があれば火にさらして乾かすのだけれど、さすがに贅沢はいってられないだろう。

腕輪をみながら俺は噴水へと服をおき、風にさらすようにしておいた、そしてそのまま噴水へとのぼり、周りをみまわす。

「さって、人をさがすべきだろうか、ま、それも服を来てからだけどなア…ううむ…」

考えてみればここはどこか情報をさがすべきかと思われる。

パンツ一丁ででていくわけにもいかないし、生乾き程度に乾いたら着てどこかにいくべきだ。

どこに？と聞かれれば口ごもるしかないのだけれど、為せば成る為さねばならぬ何事も、という言葉があるくらいだ、何事も行動に移さなければ現状は変化しない。

——鉛色の厚い雲でおおわれる空をみあげる。

「ま、何がともあれ一步前進といったところか、先行きは不安だけど…ッ!？」

ボソリ、と誰もいない上に暇だと独り言が多くなるのは人の常である。

——そのときだった。

風を切る音が耳に聞こえその落下地点がここだと一瞬で気づいたのは。

常時勇気という力がある程度まんべんなく体に浸透させるようにしているために、五感、力は常人のそれを超えている、だからこそそれを空耳なんかで終わらせてはいけない。

すぐに横へと飛んでゴロゴロと地面を転がれば、いた場所に突き刺さっているのはピンク色の何か、驚きながらも、突き刺さっているところから上に上にと視線を向けていくと、そこにいたのは…化物。ピリピリと肌が反応する、この感触は樹自信じっぴんも知っていた。

あの熊のような化物と出会った時に感じたものと同等、つまりはこいつもアレと同じものだ。

小さく舌打ちをしながら構える、化物はグルンツと素早くこちらに視線を向けると、その場から飛び出してくる。

「フッ！」

化物の直線的な一撃をかがんで避ける…と、化け物はすぐにその攻撃をとめる。

フェイントか！？とすぐに理解したが、遅かった、横からの蹴りが迫ってくる、腕に勇気をためて、その一撃をくらった。

「ガアッ!?」

腕に損傷はない、だが足のふんばりがたりなかったのだろう、一撃で体が浮き、そのまま吹っ飛んでいく、そしてどこかの民家へとぶち当たり、背中に痛みが走る。

だが耐えるために目をつぶるような暇はない、目の前には先ほどの化物がみえる、追撃にきたようだ。

飛び上がり、腕の一撃を繰り出してるのをみて、それを前へと飛んで避け、フェイントだろうが蹴りをくり出せないように、腕にためたまの勇気を使って両手で腕をつかむ。

「ウイイイイッ」

この化け物の鳴き声だろう、その煩さに顔をしかめたが、手は離さない、この化け物は今空中にいる、何故なら空中にいるままの一撃と共に、すぐに足をつかんだために民家の床に足を置かせはしなかったから、これが狙いだった。

そのまま勇気とためて、上へと飛ぶ、そうすれば化物の重さが頭に近い位置にあるために腰あたりが重心となってクルクルとまわりはじめる。

遠心力がある程度働いたと思った瞬間に――投げる。

広場のような空きがある場所へと投げ、轟音を確認する。俺は民家の屋根へと降り立ちそちらへと走っていった。

広場の近くの民家へと到着し、広場をのぞき込もうとしたとき、目の前がピンクで染まった。

「…しまっ」

しまった、避けようと思回路が追いついたが、それを行動へと移すには時間が足りなさすぎた、両手の右の指の間すべてに左手の指を入れたときの大きな拳、それが俺の頭上へと降ってくる。

ガアアンツという轟音を立てて俺は民家の屋根や床を突き抜けていき、一階へと落ちていった。

勇気を展開できたのは幸運だった、だがしかし、何分時間が足りなかった為に薄くだった為に勢いが殺せなかったらしい、ズキズキと痛む頭に手を当てると、ぬるりとした感触を感じ、見てみる。
あったのは血だった。

「ウイイイイツ」

勝ち誇ったような声でしたので上を向くと、化物が俺をみている。
小さな悲鳴が聞こえたので横をむくと、いたのはやせ細った少女とその母親であろうお方。

——追撃を化物が繰り出し始める。そのまま落ちてくる、おそらくは戦闘不能になっていると思われるのだろうか。

だが——俺はまだ大丈夫だ。

この家族を巻き込んではいけない、なぜこうなっているのだろうかなんて自分にもさっぱりだけど、狙われているのはオレなのだ。

「——クハハッ」

完全に油断しきっている化物を笑う。

そしてすうっと息を吸って俺は——言った。

「ばあかがっ！」

腕輪のスイッチがカチリと入る。

大剣が目の前に現れ、それをひつつかみ、投げる。

「ガァァッ!？」

甲高い鳴き声すら出さず、化物は自信の落下を押さえようとつかむ場所をさがす…だが見つからない。

落下は急には止まらずに落ちて行く。

そして剣は上へ上へと勢いをつけてあがっていく。

ズプリと大剣が突き刺さり、化物の叫び声があたりに響く。

そして俺はその場から転がりながら動き、化け物は太剣を突き刺しながら落下し、自分がいた場所に落ちて行く。

痛みを感じながらも立ち上がり、勇気をまんべんなく体に通すと、治癒が高速へ始まっていく。

俺は生きたえたのを確認した後、化物を無理やり仰向けにすると、剣を引き抜いた、化物の血が付いていたので腕輪に戻して腕に通す、化物が邪魔なので持ち上げて外にぽりだそうと外へと向かう。

「あ、あのっ!」

声が聞こえ、そちらのほうをむくと、先ほどの少女。

「ああ…すみません、巻き込んで。」

未だ痛みが拭えない体で、ほほえみながら俺は謝ったが少女はフルフルと首を降った。

そして俺の腕をひつつかんで、キラキラと瞳を輝かせる。

「あ、ありがとうございます。その魔物、最近この街を荒らして人を喰らっていた魔物でして、倒してくれて、本当に感謝しています。」

」

「へえ、そうなんだ…だからいきなり襲って…」

「えっと…だからお礼に…服を貸します。」

顔を真っ赤にしながら少女が入った。

心の中でへ？なんて思っ下を向けば、パンツ一丁なのを確認。

OK、俺はどうしたらいい？この顔真っ赤な少女と母親をみて、とりあえず俺は服を取りに行けばいいのかもしれないけど、ちょっと待ってくれ、この場所がどこかわからないため、ある程度探索しなきゃいけない。

街の道をパンツ一丁で徘徊する男

そう考えてみて、すぐに俺は両手をだして

「貸してください。」

…なんともかっこ悪いものである。

第十五話（後書き）

牧場物語2をひっぱりだしてひさしぶりにやっていたら気分がHO☆NO☆BO☆NOしてきたよ。

ハーベストムーンやら君と育つ島やらルーンファクトリーやらGB2やらシュガー村やら3などをやってきたけど、やっぱり2が最高だなんて思うんだ、どうせわかる人なんて限られてるけど。

ついでに作者はBLに対して別にいいんじゃない？という中立派だけれどさ、できれば自重を知ろうよ、友達が目覚めてことあることに最高だよ！っていつてくるのがキツイよ。

自分は何も否定はしないけど、それを押し付けてくるのだけは拒否したいよ。

——とりあえずほのぼのとした小説かいてみよっかな、なんて思っている今日この頃。

一週間後までにもうふた作品のストックがある程度できつつあるので、更新可能となりますよ。

第十六話

広場ではさきほどまでとは打って変わって、騒がしいほどの喧騒に包まれていた。

そこにいたのはこの街の人々。

話を聞けば、先ほどの化け物——人々は『カラヴ』と呼んでいたものが好き勝手に暴れまわっていたかららしい。

そして買ったときにみんながでてきて、俺に拍手喝采を浴びせ、料理をふるまい、みんな思い思いに騒いでいた。

——その喧騒から外れ俺は一人でこの世界に入ってきた鏡をみていた。

噴水の水は枯れ、水はどす黒い、だが嫌な顔はしてられないために着た制服をいったん脱ぎ、頭に乗せる。

ジャブジャブと音を立てて水の中へ入り、銅像に上り鏡に手を乗せ、勇気を発動する——なにも変わらない。

「え？」

変な声をあげる鏡は何も変わらない。

——ずるり、と足を滑らせて水の上に落ちる。

パアンツという鈍くも高い音を立てて水の上に落ち

「…洗い直した。」

関係ないことを考えて、今の現状を無視することにした。

——そのときだった。

さきほどの女の子が俺を覗き込んでいる。俺は水の中で力を入れて、足を底についたあとにそちらを向くと、女の子がおどおどしながら

こちらに歩いてくる。

年齢は小学生だろうか、おどおどしながら女の子は口を開けた、

「あ、あひがほおごじゃいましゅ！あふ、はんひゃっはよおお」

そしていきなり噛んだ。

和みという観点からして、雪^{ゆき}を思い出す、うん昔のだけど、今はダメだけど…何ていうか、純粹^{じゆん}というところか…ハッ！？どこからか殺気が飛んできた！？

「ああ、うん、どういたしまして。」

「ううっ、ご解説ありがとうございます。」

舌の痛みがどれたのか、女の子は羞恥心を振り払うかのように首を左右に振った。
そしてぐっと俺をみる。

「み、ミストっていいいます。」

「俺^{おれ}は樹^きだ。いっちゃんって呼んでくれ。」

「い、いっちゃん！？そんな、この街を救ってくれた人にそんな言い方は。」

「おう、どうした？」

「お父さんっ！」

いきなり横から声をかけられ、そちらのほうに視線を向けると、そ

ここにいたのは中年の男性、ミストといった少女から言うに、この人が父親か。

「ミスト？ダメじゃないか、あいつが来たら――」

「いいの、もういいのよお父さん。」

「いいって?」

「あの人がこの街を助けてくれたの。」

そういつて後ろにいる俺をミストは指す。

そうすればミストのお父さんがこちらにやってくる。

「話は聞きました、ありがとうございます。私の名前はイルファ、しがない木こりをやっております。いやぁ本当にありがとうございます、あれにはほんと困っておりますね、いつ娘が食われるんじゃないかと、いやまぁ食われたらもう殺しますけどね、殺しますけど、殺しますけどね? もう本当に殺しますけどね、うん殺す、ぜえったい殺す。」

「あ、あのミストのお父さん?」

自分の子供が殺されたらという話をしたら、殺すを連呼し始め、そのうえ目がすわってきているために思わず声をかける。――それがいけなかったらしい。

ミストの父親は、くわっと目を見開き、俺の肩をつかむ。

「お義父さんだど!?!娘はやらん!やらんぞおお!」

——こいつも母と同類か
ガクガクと揺さぶられながら、俺はなにこれめんどくさいといった
顔をしていただろう。

「お、お父さんやめてよお」

「うおおお！娘はな、『お父さんとけっこんするう』っていつて
きたんだぞ！だからやらんっやらブフウツ！」

ミストのお父：イルファはいきなり変な声をあげて倒れる。

そして倒れた後ろには、ミストのお母さんがいる——金槌を持った。
「あらあら、仕事終わりで疲れていたのですね。あら、こんにちは。
私の名前はサーシャっていうの、よろしくね。あと、この街と救っ
てくれてありがとうね。」

「いや、金槌——」

「つ・か・れ・て・い・た・んですねぇ」

「あ、はい…」

笑顔からにじみ出る迫力に押され、コクリとうなずいてしまう。そ
ういうと満足したようにミストの両親は去って行った。

——いや、引きずられることを去るっていうのかはわからないけど。

「お、お父さんったらあ…」

そういつて恥ずかしそうにしているミストをちらりとみる。

——親馬鹿だけどいい両親そうだな、なんて思いながら。

だからこそ思った、早く母さんを助けなきゃと

「いつ…いっちゃんさん？どうしたんですか？」

「ううん、なんでもないさ、いっちゃんさんのさんはいらないと思う。」

「う…い、いっ…ちゃん。」

「はい、いっちゃん、いっちゃん。」

「い、いっちゃん。」

「はいよくできたなー」

…自分でも恐ろしいほどにテンションがおかしい

その後、すぐ喧騒の中に戻る。

はしゃぎまわる街の人々の声を聴きながら、俺は自分の護ったものを感じた。

——ちよつと笑みを浮かべながら、俺はこの世界のごはんを食べ進める。

――次の日

俺は荷支度をして、街の前門に来ていた。
後ろには街の人々。

「もういつちゃうの？」

そうミストが聞いて来れば、俺は笑顔を返す。

――そうして俺は笑って言った。

「母さんを助けなきゃ。」

そういつて笑えば、何かを投げ渡される。

投げたほうをみれば、イルファがいた。

「娘はやらんが、食料はやる。」

そういつてプイツと横を向き、それをサーシャさんがニコニコと笑
いながらみている。

――本当にいい人たちだな

なんて思いながら、俺は深く深く礼をして、反転して歩き出す。

「ありがとうございましたー！」

そう叫べば、街の人々は、

「それは俺たちのセリフだ！」

そういつて、ニコニコと笑う。

——俺はいつしか走り出す。

彼らの絆をみていたら、母さんを早く助けたくて

そして数時間後。

山の森の部分も終わり、丘へと到着する。

さきほどいた街がみえる。

壁に囲まれ護られた場所、それをみながら、俺は笑い——

——突如として、街は光に飲み込まれた。

第十七話（前書き）

最高に滑った気がする。

別に文章がうまいわけじゃないんだけどこれがスランプというやつか
作業中の曲はポケモンだったりします。

第十七話

―閃光が町を飲み込む数分前―

黒い影が町へと入った。

化け物ではない、そこにいたのは人間。

黒い髪をした人間は、屋根の上に降り立つ。

「やれやれ、アイツはどこにいったのだか」

その黒い髪の男は、腕組みをしてつぶやくと、ふう、と小さくため息をつ

いた。そしてトンツと小さく地面を足でたたくと、屋根から飛び出す。

「さて、みなさん。」

その一言でその場にいた全員が振り向く。

「鏡を渡してください」

「鏡？」

上から降りてきたことに人々は疑問を感じたが、その場にいた男が聞き返す。

首を左右にふって、黒い髪の男はため息をつく、サラサラと髪が肩にかかり、それを落とすために再度振った。

「やれやれ…知らないのですか？」

「つーかあんたなんなんだ。」

「そうですね、世界の悪意の集合体による一部…いえ、簡単にいえば、魔王の部下——とでも言いましょうか。」

「…魔王の部下…ッ——!？」

「知っているようで…まあいいでしょう、鏡は絶対物質で干渉できないらしいですし…吹き飛ばせば、出てくるでしょう」

「み、みんな逃げ」

「——死ね」

光が、すべてを包み込む——。

「ハアッ、ハアッ」

山道を走り続ける。勇気を足にため続け、ひたすらに走り続けた。

そしてすぐに町に到着する。

そこにあつたのは――瓦礫の、山。

「――な」

啞然として、言葉が切れる。酸素がたりない、息をまた吸い込んだ、

「なんだよこれ……」

そして小さく、つぶやきのようにつた。

叫ぶなんて許容量はもうすでない、ありえない光景というものを
みたところでいっばいいいっばいで、叫ぶなんてできない。

そこに黒髪の男が立っていた。

「やれやれ、やっとみつかりましたか。」

――ふうとため息をついた。

手には鏡を持って、――その鏡はすぐに俺がここに来るために通り
抜けた鏡だと理解できた。

「――ッ！」

「おやおや…まだ人がおりましたか。」

黒髪の男は、紳士的な姿をして、歩いてくる。

――そして、その顔をはっきりとみたときに理解した。

コイツが、やったんだと

その顔は笑っていた。

「…お前か。」

小さく、深く

自分でも、自分が出しているのかわからなくなるほどの声が響いた。

「おやおや、最初はいいさつではないのですか？」

その声に、キッと顔をこわばらせて

「お前かッお前がこれをやったのか！」

怒りに任せて強く叫ぶ。

そうすればニヤリと黒髪の男は笑う。

「そうだったらどうで？」

「——お前を、倒す。」

そういうと黒髪の男は愉快そうに笑う

「やあってみてくださいよオオオ！」

「オオオオオオオオオオオオオッ！」

叫びながら俺は突撃を開始する。

——勇氣、いや怒りを体にまとわらせ

一瞬での移動、黒髪の男に一撃を食らわせ吹き飛ばす。

吹き飛ばされながら黒髪の男はボソリと「速いですね」という、俺はそのまま吹き飛ばされている男の先回りをして上から腕を振り上げ、下にたたきつける。

「だけど、私を倒すにはちょオツと足りませんねエエエ」

「ガッ——！？」

——なにが起こったのかわからなかった。

何故か、吹き飛ばされていた。

そして無理やり足を地面につけて踏ん張り、その場にとどまった。

「しぶといですねエ。」

「負けない、負けられない、負けたくないッ」

歯を食いしばり、俺は目の前をみる。

コイツ一人倒せないでなにを救えるというのか
母さんの敵は、もっと巨大なのだ。

「——思い出して、ちょっと冷静になれた。」

怒っても何かわるというのか、たしかに力は強かったけど、身を
任せても何もかわらない。

「前向きに考え、あきらめずに道を探す——それが勇気」

そういつて俺は腕輪をONにして剣を出す。

——諦めなければ力を出せる。

勇気をもって、怒りを持つ。

怒りながらも希望を持つ。

剣はまるで自分の体の一部のようなだ、ギュッと握り、俺は構える。

「——いくぞ。」

「……やれやれ、別に鏡なんて一つあれば十分なんですけどね。」

「…は？」

「まあもう必要はないんですけど、予備にもっていたいからなんですけどね——」

「おい、なにをいってるんだ？」

「つまり——別に戦う理由はないんですよ。正直にいうと、今のあなたと戦えばちよつと危険ですからね。感情によって力を増す——ほろぼしたはずなんですけどね。」

「お前、何を言っている。」

「——だから、さようなら。」

その言葉で、ハツとする。
捕まえようと俺は走り出す。

「おやおやアア？ いいんですか？ 生きている人間はいますよ？ 助けないでいいんですか？」

「ッ——！」

その言葉で踏みとどまり、俺は周りを見回す。消えていく黒髪の男をみているしかなかった。俺は走り出す、だれかいなかと

「…とう…」

声が聞こえた。そちらの方向に全力疾走して、到着する。
そこにいたのは、イルファ…さん。

.....

思考が停止した。

「娘はやらんが、食料はやる。」

そんな言葉が脳裏に流れた。

最後の言葉だと思いだし、自分がこの人の死を認め始めていることに気づき、首を左右にふる。

俺は近づき、手首をとる、…脈がない。

目を開く、瞳孔が開いている。

ぬるりと変な感触がした。

——血だった。

背中が焼けただれている。

まるで、何かを護るために動いたみたいに

「お兄ちゃん、おにい・・・ちゃん。」

横をみればミストがいた。

泣きそうな顔で俺をみている。

「お父さん、寝てるんだよね？昨夜飲みすぎたって言ってたんだ、だから寝てるって、もう…こんなところで寝てたらいけない…んだ…から、風邪ひいちゃ…うえっぐすっ…うんだ…よっえぐっ…ううえ…あうぐ…うえええん起きてよ…お父さ…んっ」

ああ…

最後の最後に、最高の親馬鹿をみせたのか

——未熟さを知った。

——誰がいなくなる痛みを——再び知った。

本当に、無力を知った時

——無性に叫びたくなるのを知った

叫
び
が、
響
い
た。

第十七話（後書き）

兄さんのメモリースティックをみつけた。
恐ろしい黒歴史。

でもF a t e × c h a o s ; h e a dがあって思わず読んだ。
ネギま×うみねことかやってたけど断念してた。
ちよっと返してくる、怒られそうだ。

第十九話

泣き声が聞こえる。

ミストの声だということはわかっている。

俺はミストの手を引きながら、何も言わずに歩き続ける。

光に飲み込まれた街を背景に、振り向かずに。

たくさんの土の山、それがお墓というのは一目瞭然だろう。

俺はその風景を思い出して、ギュッと、ミストの手を握っている手に力をいれた。

——俺は、無力だ。

それを痛感して、それでもなお、俺は歩こうとする。

——母さん、俺は強くなるよ。

手を引いているミストをちらりと見て、思い出すのは手を引いてくれた母さん。

重度の息子馬鹿だけど、それでも、大切な家族だ。

だから、俺は母さんみたいにこの子の手を握っていなきゃいけない。

俺はそつとミストの腰のあたりをつかんで、力を入れて上にあげる。
軽いなあなんて思いながら、俺は肩車をした。
ミストはキョトンとすると、すぐに泣き始める。
そして俺はそのまま走り出した。

―元の世界―

「おかしいわね…」

「うん…」

心配そうに二人の女性が樹いつきの家の前にいる。
その後ろには一人の男性が、ヤレヤレといった感じで息を吐いた。

「由梨ゆりはまったく、素直になれないんだから。」

ポツリと漏らした言葉が耳にはいったようで、由梨ゆりは顔を真っ赤に

しながらビシィツという音がでそうな迫力で兄である紅くれないを指し、叫ぶ。

「べ、別にあいつが心配とかないわ!」

「ハイハイ」

少々ニヤニヤしながらいう兄に、由梨ゆりはウーッとうなり声をあげて威嚇するが、紅くれないはアハハと笑って受け流す。

その様子にさらに由梨ゆりの怒りのボルテージがあがっていくが、その怒りは発生した金属音でかき消された、思わず音のほうに兄妹は視線を投げかければ、そこにいたのは雪ゆき、そしてその女性の手には――玄関のドアの取っ手部分。

「――ゆ、雪ゆきい…? どうしたのそれ…?」

「とったの。」

「いや、とったって…」

「いっちゃんを探すのに、なりふりかまってられないの。」

その言葉に由梨ゆりはクハッと思わず笑ってしまい、紅くれないはひきつった笑みを浮かべる。

「あっはっは! そうねそうね! もう樹いつきのやつあったらどうしてやりましょうか!」

「うん、とりあえず思いつきり抱きしめてから考えよう。」

「くく…やっぱ雪にはかなわないわね。じゃ、証拠集めにいくわよ？」

「うん！」

そういつて二人の女性は歩いていき、紅はその後ろ姿をみる。
——ものすごいひきつった笑みを浮かべながら。

「(男としてはうらやましいはずなんだけど…)」

家族であるところを抜いても由梨は美人だ。
雪もきれいになった。

——でも、でもね、樹くん。

「(自身がこの状態になるっていったら絶対辞退するだろうね。)」
そんなことを思いながら、空をみて紅はクスリと笑い。

「(がんばれ!ずっと見てることにするよ!)」

このことに関して樹に対し、何かしら干渉をすることをやめた。

「(怖いからね!)」

「じゃ、手分けしてさがしましょ。」

「うん！じゃあ私いっちゃんの部屋ね！」

「なんでそこ限定になってるのよ…」

雪の言葉に由梨の突っ込み、とりあえず紅は提案をしようと前にでる。

「みんなで探せばいいよ。僕は一階にいるから二人とも樹くんの部屋を探せばいいじゃないか。」

「そうだね！」

「そうだね！じゃないわよ、なんで樹の部屋限定なのよ！」

「じゃあ雪ちゃんは樹くんのへ「なんでそうなるのよ！」…ふう、やっぱり二人でいきなよ。」

「…むう…わかった。」

やれやれ、とため息をついて紅は一階を探し続けることにした。

ドタドタという音が上からするのに苦笑いを浮かべながら、紅は下を探し続ける、すると、いきなり音がやんだ。

「…?」

不思議には思ったが、まあ落ち着いたのだろうなんて思って搜索を開始する。

そして30分がたち、紅はさすがにおかしいと思い上へいってみることにする。

「由梨…?」

妹の名前を呼ぶ、返事はない、寝ていたら風邪をひくかもしれないと思って樹の部屋へはいり、見回す。

「…なんだ、これ?」

自分を反射しない鏡、それをみつけて紅は鏡を叩いてみる。

だが、音もしない、衝撃も起こらない、…おかしいと首をひねり。

「…ま、不思議なことには慣れてるから、ね。」

そういつて紅はクスリと笑い、そのまま鏡にズプリと指をいれる。
そして、そのまま入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5708r/>

転生…いや…いいんだけどさ

2011年4月29日18時07分発行